

第9回高等学校改革プラン推進委員会（第四推進委員会）議事録

1 日時 平成17年10月7日（金）午後2時00分～午後5時00分

2 場所 長野県松本勤労者福祉センター 第1会議室

3 出席委員

中條 利治委員長	野口 廣子委員
百瀬 哲夫副委員長	下川 隆委員
宮川 正光委員	藤本 光世委員
小林 進委員	長谷川 功委員
今井 隆一委員	鈴木 義明委員

4 開会

（中條委員長）

これより本日の推進委員会を始めます。本日は都合がつかない方もいらっしゃって、14名中10名のご出席ということで進めさせていただきますが、予定された全員がおそろいですので、少し、数分まだありますが、始めさせていただきますと思います。

最初に、前回、第8回以降の県会等も含めて、他地区の状況等、県教育委員会のほうからご説明、ご紹介お願い申し上げます。

（西牧主任教育支援主事）

それではよろしくお願いします。

まず、他地区の推進委員会の状況でございますが、9月21日の水曜日に、北信地区の第8回の推進委員会が開かれました。そこでは、多部制・単位制高校の議論が中心となり、「通学区の中心部となる都市部に設置することが適切ではないか」といった意見、あるいは「既設校の転換を前提とすると、長野市に設置するのは難しいのではないか」といった意見が出されております。

それから、第1通学区内の配置を考えるだけでなく、第2通学区との関係で配置も考えなければいけないということで、第2通学区との情報交換の必要性ということも話題として取り上げられました。

続きまして、翌日の9月22日の木曜日に、南信地区の第8回推進委員会が開かれております。そこでは、やはり多部制・単位制高校についての議論が深められ、本県にとって新しい種類の学校であるのでイメージがわきにくい部分があり、メリット・デメリットを理解していきたいとの意見が出されております。

それから、9月25日の日曜日でございますが、東信地区の第8回推進委員会が開かれております。そこでは総合学科高校と多部制・単位制高校について議論がなされました。特に総合学科高校については、塩尻志学館高校の先生を招いてその説明を受け、質疑応答を中心に集中的に審議を進め、総合学科についての理解を深めたということでございます。これが他地区の推進委員会の検討状況でございます。

続きまして、お配りしました2冊の冊子を出していただければと思います。同じような形のものですが、2冊のうちの1冊は、この9月27日から10月3日の間に開かれました

県議会一般質問の質問答弁内容になっております。それからもう1冊は、10月4日から昨日まで開かれておりました文教委員会の質問答弁要旨でございます。いずれも未定稿でございますので、推進委員の皆さまの中の範囲でということをお願いしたいと思います。

まず、県議会一般質問の件でございますが、質問に立たれた30人の議員の皆さまのうち12名の方から、高校改革プランについての質問をいただきました。その中の主なものとしましては、まず再編整備に伴う財政試算についての質問がございました。8ページをご覧ください。財政試算ということで質問があったわけですが、それに対する県の考え方としまして、教育長職務代理者から、「財政的な効果についてお示ししますと、教育的な観点より財政的な観点が強くなってしまふことを危惧（きぐ）しておりました」と。ちょうど真ん中あたりのところですが、「しかしながら、再編整備の及ぼす財政への影響について示すようにという要望が、それぞれの推進委員会におきましても多いところから、仮に現在推進委員会にお示ししている県立高校再編整備候補案のとおり、平成19年度より計画を実施するならば、完成年度においてどのようになるかを推計いたしました」ということで、この件につきましては、後ほど資料2ということで、また提示をさせていただきたいと思っております。

続きまして、6月の県議会に引き続き、慎重審議を求める意見も多く出されました。18ページから19ページの所をご覧ください。それに対する県の基本的な考え方としまして、18ページの一番下の所からですが、「平成15年度にワーキンググループを立ち上げまして検討を始めております」と。そして、19ページのほうですが、「それに基づいて実施計画をつくり、18年度以降それにのっとって進めてまいりましても、完成形にもっていくまでは、平成21年度でございますので、スタートして7年ほどの時間を要するわけでございます。この間に、今ご案内のとおり高校生の数というものは、平成2年をピークに大きく減っているわけでございまして、そのために活力ある高校教育というものができかねるということで、やはり再編整備は避けて通れないということで、今回いろいろお願いしているわけでございます」と。あと細かいところはお読みいただければと思います。

それから、多部制・単位制高校につきましても、多くのご意見、ご質問をいただいております。時間の関係で割愛させていただきますが、5ページから7ページの所、あるいは10ページから11ページの所に記述されております。また見ていただければと思います。

なお、魅力ある高校づくりについての教育委員長さんの発言につきまして、若干の言葉足らずの面があり、「大学進学の実現を」と受け取られてしまったため、それに対する補足説明ということで、これは31ページの所に載っております。特に読みませんが、意図しているところをご理解いただければと思います。これが一般質問の質問答弁内容でございます。

続きまして、文教委員会の質問答弁要旨でございますが、やはり文教委員会におきましても、慎重審議を求める意見、あるいは白紙撤回を求める意見という分が多く出されております。12ページあるいは15から17ページの所、さらには20から21ページの所に出ているかと思います。それに対する回答は、右に記載されておりますとおりでございますが、基本的な考え方としては先ほど述べたとおりでございます。

それから、年間の削減経費、23億円につきまして、19ページから20ページにかけて、

それから 22 ページから 23 ページの所に、記載されておりますので、これも後ほどご覧いただければと思います。

それから、総合学科、多部制・単位制高校についても、文教委員会で非常に多くの質問、ご意見を、とりあえずいただいております。4 ページ、あるいは 9 ページ、さらには 25 ページから 28 ページの所に、それが載っております。26 ページの所をご覧ください。他県の取り組みを実際に視察された委員の方から、「総合学科や多部制・単位制について視察を行った。だいぶ自分が思い描いていたものと違っており、プラスの印象で帰って来た」という発言をいただいております。さらに少し飛びますが、「総合学科の生徒は、生き生きとやっていた」「多部制・単位制は、活発さは感じられなかったが、自分の居場所を確保していると感じた」という発言もいただいております。

つきましては、推進委員の皆さまにも、実際に見て来ていただきたいという強い要望がありましたので、事務局といたしましても、その機会を今後設けるように協力していきたいと考えております。日時、場所につきましては、あらためてご連絡申し上げますので、ぜひご都合をつけて参加していただきたいと思っております。日時につきましては、相手校の都合もあることですので何とも言えないのですが、大体 10 月の下旬から 11 月の上旬、それから訪問校につきましては、県内県外を含めていろいろ検討したいと、このように考えております。

以上でございます。

（中條委員長）

はい、ありがとうございます。質問があろうかと思いますが後回しにさせていただいて、1 件だけ、多部制・単位制高校の視察は、「平日、日帰り」ということでよろしいですか。

（西牧主任教育支援主事）

はい。

（中條委員長）

だそうです。

それではまず、前回の第 8 回、9 月 18 日になりますが、前回第 8 回の議論の確認をしたいと思います。

まず前回、資料説明として、県教育委員会へあてて委員さんからということで、1 点、経協が県教委あてに、県知事および教育委員長あてに要望書を出されていますので、それについて今井委員から口頭でご説明をいただきました。

それから、前回、大北地区でしたので、大北の地区の高校改革プランについてのその後の状況ということで、下川委員からご説明をいただきました。それを受けて第 12 区大北地域の個別論議に入りましたが、まずは再編についてということで、実施時期については全地区、10、11 区もまとめて後でということで、実施時期を除いて再編そのものについてということで議論をいただいております。

簡単に確認させていただきます。大北地区としてではなく南安地区も含め、大系線沿線

として見る必要があると。南安大系線には中学生が1,000人、それから3校13学級、大系線沿線で見れば、大北も含めると1,500名以上多い、総数決定基準でも、現在の大北・南安の高校数7校が維持されるのではないかという。これについては、今日も資料をいただいています、南安地区中学校の通学地域の検証は次回以降ということで、今日、確認をさせていただきます。

それから、12区はキャパ的には出ざるを得ない状況にある。それから北安は南安に子どもころから親しみがあり、流出している現状を肯定するほうが見方としては普通である。

それから、各高校の魅力の差。それは各高校の魅力の差によって学級数を減らせば、流出の生徒数が減少するという論理には無理があるかと。

大町、大町北は、ずっと充足率をこれまでも満たしてきたはずだが、ということに対して、県教委のから口頭で、平成1年ですかね、各、ここは7学級の生徒数に合わせて、現在、大町は理数科も含めて4、北は3学級に削減したと。で、合わせて大北地区の各高校の平成1年以降の学級数推移を口頭で説明いたしました。

それから、仮に大系線沿線校の学級数を減らした場合、どのような弊害が予想されるかということのご質問がありましたが、これは県教委から、私立高校への影響と、その中で的人气校、大北、南安地区でも、公立人気校への集中化が懸念がされるという説明でした。

それから、各高校の進路、進学就職の実態はどうかということで、これはホームページでも確認ができますが、今日、一覧をご用意いただいておりますので、これも後でご説明いたします。

それから、その後個別に入りまして、白馬高校の存続について。これについては、これまでも白馬高校自体、コース制導入等を検討、実施をしてきたということで、必ずしも手をこまねいていたわけではないということ。

それから、地元の小谷中学の白馬高校への進学に比べて、本当の地元である白馬中学の進学率が非常に低い。

それから、地元で住民アンケートを実施されたようですが、これの回収率にしても小谷に比べ白馬のほうが悪くて、地元のほうが関心が薄いのではないかというような危惧がご紹介されました。

それから、両2中学、120名の卒業生がいらっしゃるんですが、そのうち42名しか白馬高校には進学していない。2学級、現在80名ということですが、現実というか、実際2学級充足ができていないで、トータルの入学数が69名ということです。

それから、このままでは存続させても数年後には1クラスの危険性があって、単独校として存続というよりも、大町地区高校の分校化のほうがむしろ現実的ではないかというような意見。

白馬高校の魅力づけのためには、オリンピック遺産やホームステイなどのメリットを、白馬ブランドで出すかということが可能ではないか。ただ、地域の活力を上げてこそであって、高校だけを議論していても駄目だというようなご意見。

それから、中学数が、木曽は10中学なんですが、大北地区は8中学ということで少ないので、中高連携をとったらどうかということに関しては、地元でも検討が始まったという紹介がありました。

それから、全国募集をしたらどうか。ただしこれは、既に推進委員会などでもう紹介さ

れています。飯山南の例をとっても、過度の期待は危険だろうというようなこと。

それから、まずはコース設定等の魅力付けをして、せめて地元志願率を高めるべきではないか。その一例として、過疎高齢化を踏まえての福祉課コースの多部制はどうかというご意見がありましたが、委員さん、それから県教委のほうからのご説明では、ホームヘルパーの2級、3級資格は取得可能であるけれども、就職に必要な介護福祉士2級以上ですかね、これでは専門時間等の関係で、高校では取得が不可能だという、県教委からのご説明がございました。ただしその後、情報として厚労省がホームヘルパーを廃止して介護福祉士で一本化するというような情報があるということで、もし必要があれば県教委のほうからご説明をいただきます。

それから、続いて大町高校、大町北高校の統合。これは再編案のたたき台の中に入っているんですが、2校のままだと、このままではじり貧になってしまうリスクがあったと。

それから、今後、今まで以上に多様な子どもたちが入ってきたときに、このままというのは将来2学級程度にもなりかねないということなんですけれども、このままで持ちこたえられるかどうか。統合することで魅力付けがされれば、11区から逆に戻って来る子もいるのではないかと。統合して、大町地区での進学校化を目指すべきだと。その際、多様化に応えるべく、習熟度別であるとか特進コースなどの取り組みが必要ではないかというご意見。

それから3学級に仮になったとしたときに、3学級でもできる魅力ではなくて、規模の魅力も、これまで同様推進委員会会議を行っていく必要があるというご意見がございました。

ということで、大北、他地域もそうですが、1回ではいけませんので、次回2回目以降でも、これ以降前へ詰めて進めていくということになります。従って、今回、第9回での議論の中では要求資料は、大系線沿線中学の高校への進学実態、大北それから南安地区ですね。それから第2通学区の進路、就職それから進学の実態ということで資料をいただいています。今回は、10、12、11の順番でということでしたので、旧11通学区、第11区、長野、南安曇、それから松塩、松本塩尻地区の個別論議に入るということになります。

それでは、お手元に今日配布いただいた資料のご説明を、事務局からお願いいたします。

5 資料説明

高校教育課西牧主任教育支援主事から説明 【説明内容省略】

(中條委員長)

はい、ありがとうございました。それでは個別論議に入る前に、他地区というよりは、どちらかというと県議会および文教委員会なのかもしれませんが、これにご説明いただいた内容、これについてのご質問等がございましたらお願いいたします。今まで配布された資料を含めてです。よろしいでしょうか。

では、私のほうからご質問をさせていただきます。これは、第2回、第3回の我々の推進委員会の中では、経費削減が目的ではないということで確認し合った。で、総合学校等、必要な場合は、ミニ総合学科も含めて、当然答申をしていくんだということで確認いただいた。で、今回ここに示された23億、このうち人件費が90パーセント近い80数パーセ

ントありますが、これはあくまで結果論であって、目的でなくて結果なのか、そもそもこれが目的なのか、その辺を簡単に結構ですが回答いただきたいと思います。

（吉江高校教育課長）

お答えをする前に一言お断りしておきたいと思っておりますが、委員さん限りということで未定稿でお配りいたしました、一般質問の質問要旨と文教委員会の質問要旨は、その表紙にございますように、高校教育課ということでしたためましたものでございます。それで、そのようなこともありまして、本来ですと一般質問の答弁というものにつきましては、正式に議会としてまとまったものが後日出されますものですから、委員さん限りの未定稿ということで、まずはご理解いただきたいと思います。

その上で申し上げたいと思いますが、基本的には今回の9月の県議会、現在も継続中ですが、それにおきまして、議員さんから質問通告等が、まず一般質問の初日に、何人かの議員さんから質問通告で出された結果がございました。

それと、かねてよりそれぞれの推進委員会におきまして、いろいろな質問の形の中で、経費的なものの削減案とかあるいはシミュレーションとかというような言葉で、やはりそのようなものを出すべきではないかというようなお話も、ちょうどしたわけなんですけれども、先ほど担当のほうから説明申し上げましたように、財政議論に傾くということがいかなものかというようなことから、私どもは従来からは、このようなことはご用意してなかった次第でございます。

しかしながら、だいぶ、それぞれの推進委員会ももう8回を数えるということで、さらには県議会におきまして6月の定例県議会におきましてそのようなご質問をちょうどいいし、さらに9月にもそのようなご質問をちょうどするような形になっているということの中で、あえてお出ししたわけです。

私も日ごろから、あくまでも今現在の高等学校が縮小されつつあるという規模の状況、このような規模が、今後の、将来の高校教育を考えた場合に、決していいものであるというような認識をしていないということから、今回の魅力づくりに合わせての再編整備、さらには総合学科高校や多部制・単位制の設置ということを考えての次第でございます。あくまでもこれが主でございます。

そして、結果として23億というような金額が出てはおりますが、答弁の中でまたご覧いただきますとおわかりのように、この額には今後、通年ベースで23億が削減したとして、総合学科とか、ある程度かかるであろう経費というようなものは抜けております。ですから、かかる経費を、今後最終的な局面におきましては、具体的な再編整備の姿が見えてきた段階で、いかにプラス要素の部分があるかというようなことは、あらためて積算してみたいと考えております。

ですから、そのような意味で考えた場合には、先ほど申し上げましたように、あくまでも結果としてこのような金額が出ているということでご理解願います。

6 議事

(中條委員長)

ありがとうございました。専門高校でも、もう既に教員、それから行政職員何人でいくらか、それから光熱出納費等でいくらかという数字が出ていますので、数値そのものの扱いはお気をつけくださいということですが、数字等はもう既に公表されている内容でございます。

ほかに、委員の方からご質問はよろしいですね。はい。

それとあと、それも未定稿の中にも書かれていますが、これは質問ではなくて委員が代表しているということで、各推進委員に魅力付けの検討すると言いながら、魅力は大学進学だって言われてしまいますと、では我々はなぜ今まで議論してきたのという気も、むなしさといえますか、しないでもありませんので、そこはぜひ、訂正発言は承知しておりますが、ぜひ県としてよろしくお願いしたいと思います。

それから、これは県議会ではありませんが、木曽地域のシンポジウムの新聞報道がありまして、委員のみんなが、木曽高校を木曽山林に統合するという案は、委員のみんなが疑問に感じているという報道が、発言としてされていますが、確かに大方の意見としては、インフラ効果をみて不自然であるという声でしたが、議決を採って賛成多数とか、全員が賛成ということでも確認をしたわけでもありませんので、ただそういう趣旨でご発言いただけているかもしれませんが、報道はそのような報道になってしまっていますので、これは我々一人一人が、もしそのようなことがあれば、ぜひ正しいご発言をお願いしたいと思います。

それでは、予定どおりで11区、松塩地区に入ります。前回同様今回も、後で例示ということですが、個別論議の検討ポイントを、今回ちょっと1枚にならずに2枚になってしまって申し訳ありませんが、配らせていただきました。順番を、今日は全部はできませんけれども、1番として、前回、大北地区と同じように再編案そのものについて、これは実施時期は個別論議のところから外して、最後の段階で報告をさせていただいたという前提でお願いいたします。

それから、多部制・単位制について、今日の資料にも出ていますが、総合学科については別で既に議論をいったんしておりますけれども、その中での再確認ということで、松本筑摩については多部制・単位制移行、それによって全日制が解消される。現在3学級ありますけれども、これを再確認。

それから、そこに書いてありませんが、総合学科は、第4通学区にはもう既に塩尻志学館が設置され、かつ最初のほうの委員会で、その設置効果等々、委員さんからの質問も含めてご紹介いただけていますが、それも必要であるなら再確認。

それから、前回、鈴木委員からありました大系線沿線ということも、考え方というのでしょうか、見方も必要であるということで、前回は大北中心の話でしたが、今回は南安曇の高校について、大系線沿線というような見方もしながら、議論をしたいと思っております。

それからその後時間があれば、都市部校、それから専門高校、それから都市部周辺校、それからその他というような順番で、今日できる限り進めていきたいと思います。

それで、お手元にお配りした資料を1枚、前回シミュレーションでお出したものと同

じ形式のものを配りました。これは、表題を付けましたように、大系線沿線中学の学級数推移と総数決定基準の関係ということで、これまでは前回の 10、11、12 区ということでつくりましたが、12 区のところは全く変わりませんが、その下です。11 区大系線沿線中学、この欄の所が、前回、鈴木委員がやりましたところを踏まえて計算してみました。

ただし、手元にある資料が、平成 17 年の各中学の卒業数と、今日も配られていますが、各高校よりの進学数、これがこれしかありませんので、非常に乱暴なんです、この平成 17 年の数をベースとして、例えばまん中の欄、11 区大系線沿線中学が、平成 17 年を見てもみますと、949 名卒業生がありました。このうち大系線沿線高校への進学者が、南安曇の 3 校、豊科、穂高、南農に 277 名進学し、それから大北地区の 4 校で 91 名の学生さんが進学しています。これの合計が 368 ですね。これも実数です。これの上にある 65.1 パーセント、これは平成 2 年に対しての 11 区全体の数字ですが、これを平成 2 年から平成 31 年までの、去年生まれた子どもたちまでの年度の入学数、この数字を使って、上の全体の生徒数、それからそれに対する 368 の比で、それぞれ年度のシミュレーションとしての大系線沿線高校の進学者を出し、かつそれを南安と大北 4 校の比率で同じように割り振っています。これでいったときに、総数決定基準というのが、その欄の下から 2 つ目に、1.69 といった数字がありますが、仮にこの比率で平成 31 年までを見ていったときに、期間平均値、これは前回、前々回ですかね。平成 18 年から 31 年までの期間平均値を、総数決定基準上は用いたというご説明がありましたので、これを出すと 1.72、2 校を切る数字が出てまいります。

その下に大系線沿線合計とありますのは、前回ご発言にもありましたが、大系線沿線中学と大北地区を合わせると 1,500 人を超えるというご説明がありました。実際、旧南安曇郡というと、旧奈川村、それから安曇村は南安曇郡でしたが、ここの中学生、大野川、それから安曇、奈川ですね。実数で 29 名というのが平成 17 年の卒業数です。29 名が卒業生数です。この人たちは沿線とは言えませんが、ここでいう「南安」からははずしました。従って、ここに該当しているのは、欄外の注意書きにありますように、豊科の北、南、それから穂高東、西中学、それから沿線の駅に近いという意味で、梓川、三郷、堀金の 3 中学、合計 7 中学をここに入れてあります。

ということでやりまして、後は前回お配りした 12 区の数字、期間平均値で今の比率で言うところ 2.39。それから、全員が 12 区から一切流出せずに大北地区の高校に進学したとき 2.84。これと 1.72 を足すと 3.81、それから 7.34 という数値が出てまいります。

ということで、その下にシミュレーション結果を書いてありますけれども、計算上は確かに、1,500 名を超える生徒全員が進学すれば、期間平均値で現在 7 校を上回ると。しかしながら 7 地区の 1,000 人が、現在でも進学率 39 パーセントです。40 パーセントいかないう進学率が、魅力付けの結果として大系線沿線の高校に進学するというのはちょっと無理があるんじゃないかと。常識的に分析してのシミュレーション結果で 3.8 もしくは最大の 12 区は前進をするとしても加算しても 4.5 が妥当ではないかというようなシミュレーション結果。あくまでも参考ですけれども、参考にしてみました。

ほかに県教委側としては資料はありませんでしたか。よろしいですか。

それでは先ほど言った順番に入りますが、その前に、今日お持ちいただいているかと思いますが、県立高校再編整備候補案、各旧通学区別に分かれたもので、第 11 区については、

松本筑摩高校の多部制・単位制への転換、それから松本筑摩高校と松本工業高校の定時制への再編、これだけが再編案の背景等々の説明資料としてお配りいただいておりますが、これは特に説明はよろしいでしょうか。はい、ではこれは省きます。

それから、お配りさせていただいていますイメージ図ですね。の11通学区、これも参考にしていながら議論を進めていきたいと思います。

それでは、再編案そのものについてということで議論に入ります。県教委から出されている再編案では、第11区、旧11通学区は、松本筑摩高校の多部制・単位制移行に伴う全日制の廃止これが、全体では20から17へというマイナス3校が、第4通学区になります。そのうちの1校減というところに該当しています。

それから、前回お配りしたような学級数、それから生徒数からのシミュレーションでいいますと、10と12区に比べて生徒減少が非常に少ないエリアになりますので、最終的でないわけではありませんが、平成の20何年ですかね、までは、現状、17年に比べて増加することもあり、その生徒数も減少はないと。

従って常識的には、既に、再確認するとしても、全日制の廃止が1校で、常識的には現状のままというようなことかもしれませんが、ただ、それにこだわらずという前提ですので、それ以外のことも含めて、ぜひ議論をしていきたいと思います。

個別高校については2番以降でやるとして、再編案そのものの総数決定基準と地域性を踏まえての高校数をどうするか。それを中心にまず議論をいただいて、大系線沿線は3番の所でまた、そこに焦点を絞って、総括して議論したいと思いますので、よろしくお願いします。

それでは1番です。再編案そのものについてご意見がございましたら、ぜひお願いします。

(鈴木委員)

筑摩高校の3学級分の募集停止という候補案があることと、県から出された南安地区、大系線沿線の中学校の進学状況等の、これからの論点の関連でひとつ質問したいのですが、これは卒業生の総数ですか。私が調べていた数よりもかなり少ないのですが。

(西牧主任教育支援主事)

これは、そこに書いてありますとおり、進路状況ではなくて進学状況なものですから、実数よりは少なくなっていると思います。

(中條委員長)

そういう意味ですか。949名はこれを使っていません。県外へとか全部の高校卒業生で計算して949です。

(鈴木委員)

16年度の在校生数ですね。

(中條委員長)

17年3月に卒業して、4月に高校へ入った生徒数です。

(鈴木委員)

では、続けていいですか。

ということは、949名が卒業したのではなくて、これにプラス50人ぐらいは学校へ行かない生徒がいるということですよ。私の計算では、委員長と同じ発想で、私ももしかして計算間違いかもしれませんが、南安の奈川と大野川、安曇をのぞいて7校だと995人だったのですが。

(西牧主任教育支援主事)

この資料1でございますが、全日制、それから定時制、それとあとは私立高校への進学状況ということで、この949という数字になっております。

(中條委員長)

そうなるとこれ以外に何人かいるということでもいいですか。

(西牧主任教育支援主事)

考えられるのは高専、あるいは自律の関係の学校でしょうか。それとあと就職でございます。

(中條委員長)

それをもって議論してもしょうがないので、次回までに一応もう1回確認していただけますか。949人に含まれない数が何人か。個別はいいですね。ただ、そこで100人足しても、あまりシミュレーション上に影響は出てこないと思いますが。

ほかにご意見やご質問等ございましたら。では、再編案そのものだと意見は出ないですか。議論になりにくいですか。であれば、個別論議に入っていきたいと思います。

それでは、すいません。こちらのルールに沿ってやってまいります。

今も少しご発言がありましたが、まずは再編をベースにしますと、松本筑摩の多部制・単位制の移行に伴って、全日制1校分が減になります。多部制・単位制の移行については、これまでの通信制等々含めて、筑摩のこれまでの実績や校風については、これまでも委員会の中でご紹介いただいて、多部制・単位校を設置するということと、それからその筑摩を松本筑摩を候補とするという意見については、第何回かは記憶はございませんが、確認いただけたということで記憶をしています。

それそのものについて、もしご意見があれば、この推進委員会、第4のほうは多部制・単位制に近い学校、それから総合学科そのものがありますので、少しほかの地区とは、我々の想定が違うのかもしれませんが、よろしいですか。

そうすると、これに伴って1校分にあたる全日制の廃止ということで、3学級が減ることになりますが、この3学級の扱いを、県教委として何か見解をお持ちであればお願いします。

(柳澤教育主幹)

募集学級数につきましては、毎年中学校卒業者数が異なっておりますので、それを見て毎年募集定員を決めるということになっておりますが、今ご指摘の松本筑摩高校3学級につきましては、ほかの学校の募集の中に吸収できると、このように考えております。

(中條委員長)

必要があれば、それは3学級、ないしは必要学級数を増やすということでもいいわけですね。

(柳澤教育主幹)

はい。そうでございます。

(中條委員長)

それは、例えば普通科なのか、専門科になるのか、2学科はその年々のプラスとして考えるのですかね。

(柳澤教育主幹)

はい、そういうことでございます。

(中條委員長)

これに関して、何かご質問等、ご意見等がございましたら。

(鈴木委員)

確認ですが、筑摩の120人分を単位制・多部制には含めないということで認識していいですか。

(柳澤教育主幹)

基本的にはこれまでどおりのことを今、考えておりますので、松本筑摩の現在の昼間・夜間の分は、いわゆる定時制という扱いになっておりますので、全日制としての募集の県の決め方というのは、従来どおりでいきたいと考えております。

(中條委員長)

そこから、ご質問等、ご意見はございますか。

今までの議論の中で、統合というか廃止をされる高校については募集停止がされるということで、今までの1年生は、いつまでたっても下が入ってこないというようなご意見が確かあって、いつからやるかというのは別にして、そういうところのケアが必要だというご意見があったと記憶していますが、この筑摩の全日の統合はどうなるのでしょうか。

どうケアするかという意味ではなくて、扱いとして、筑摩にそのままいて、あと普通科の子どもたちが入ってこないのか、もしくは、将来3学級をどこかに割り振るというのと同じように、どこかの高校の普通科に、今の3学級の子どもたちは希望すれば移籍できる

とか。移籍といいますか、転校できるとかそのようなことはいかがですか。

（柳澤教育主幹）

基本的には、入った学校を卒業するまで、きちんとした教育の保証をしていくというのが基本的な考え方でございます。

（中條委員長）

そうすると、最後は3年生だけの1学年が残って最後に筑摩高校を卒業するということですね。

（柳澤教育主幹）

はい。

（中條委員長）

わかりました。

（鈴木委員）

県は、先ほどの静岡の例を出したり、前には富山の志貴野高校の例を出したり、さらに候補案には3部ということが議案されていますよね。それぞれの例を出した学校は、多分3部それぞれ80名ずつ、2クラスずつの募集で午前、午後、夜で、240名ぐらいの募集で、それを考えているのかなというように思いますが、そういう規模で募集をかけたときに、はたして全日制の日課でもって授業をやり、クラブをやり、体育施設などの施設を共有していくことが可能なのかなのか。

私は、県の今言った意見はちょっと意外で、県のモデル校として出してきたものであるとか、再編整備案を見ると、これは筑摩高校だけではなくて、他の3つの通学区における単位制・多部制高校の生徒もそうだろうというように思っていたんですが、今の1年生が3年生になるときは、いわゆる課程変換をしなければならないだろうと。で、18年度の入学生についても、2年になったときには、いわゆる全日制課程から定時制課程に課程変換をして、単位制の中で74単位取って、卒業していくことでしか、技術的な面、あるいは物理的な面ではできないだろうということを考えていたわけで、県の発言はちょっと意外なんです、その辺はいかがですか。

（中條委員長）

すいません、わからないんですが、それは技術的、物理的という意味は、先生が例えば当然、違う学年に上がってくれば、必要な先生が伴って、全日制普通科としての必要単位数が取れなくなるんじゃないかという意味ですか。今の説明は。

(鈴木委員)

それもあるかもしれませんが、例えば3部であれば、朝、午前中4時間、モデルでいえば45分授業ですよ。組むわけですよ。で、午後もしっかり組むわけですよ。その間に1時間の休み時間は…。

(中條委員長)

全日制普通科は、多部制・単位制とは別に存在するわけですよ。

(鈴木委員)

そうですね。

(中條委員長)

少なくとも消滅するわけではなく。従って、先生たちが兼務するのではなくて。

(鈴木委員)

生徒が、いわゆる多部制の生徒の学習活動と、矛盾なくというか摩擦なくというか、できるのかどうなのかという問題では、県の示しているような3部で、恐らく80名、80名、80名の240名という活動生が来た場合に、本当に全日制の生徒が、3年になって校舎を使い、チャイムを鳴らして授業をやり、それが可能なんだろうかということで考えれば、これはちょっと不可能だろうなというように考えたので、課程変換なのかなというふうに考えたんです。そういうことです。

(中條委員長)

回答をお願いします。

(柳澤教育主幹)

先ほどお話ししましたように、基本的には課程変換ということは考えていません。ほかの例えば総合学科に転換するというような計画の場合にも年次進行で転換していくということになりますので、今の具体的には松本筑摩高校の場合でも、先ほど委員長さんがおっしゃっていましたが、全日制の生徒は全日制に入った教育課程を保証して、卒業まではきちんと教育を提供していくと、このような考え方でおります。

(中條委員長)

ほかにご意見は、ございますか。

いずれにしても、全日制普通科に入った子どもたちが、1学年いなくても必要な単位が取り、必要な授業が行われ、部活動や学校活動等に支障がないようにしていくということですね。

(柳澤教育主幹)

はい。

(中條委員長)

絶対筑摩から動きたくないという子どもも、当然いると思いますが、小規模校の弊害ということで議論した中で、1学年だけで3学級、120名というのは、先ほど鈴木委員がおっしゃったように、多部制・単位制で時間が変わったりしたときに、全日制だけの小規模校化、少数化の弊害というのは、別にリスクとしては考えられないことなんですか。考えなくていいのですか。

(柳澤教育主幹)

いろいろな方策が考えられると思っておりますが、例えば多部制・単位制のクラブ活動というようなことを考えましても、いわゆる定時制に属するわけでございますが、クラブ活動は、高体連も高野連も全日制の大会にも希望すれば参加できるわけでございまして、同じ敷地の中に全日制課程、定時制課程、通信制課程がありますが、文化祭などは合同で、一緒にやっているわけでございます。そういった行事、あるいはクラブ活動、こういったことは工夫次第で合同で、いろいろな活動が工夫できるのではないかと、こう思っております。

(中條委員長)

筑摩について、何かご質問、ご意見はございませんか。よろしいですか。ではいったん次へいきたいと思えます。

それでは3番目、先ほども大系線沿線というお話がございましたが、まあ前回からですけれども。それから、南安地区ということで絞って議論を進めていきたいと思えます。

だいぶ前ですかね、2回目か3回目のときに、そのときはまだ再編候補案が出ていませんでしたので、推測の範囲の中で、いわゆる地域校だけが対象になって、しまうのではないかと。従ってその対象とならない都市部の高校は我関せずで、ある意味魅力付けだとか、関係ないというような話はないのかというようなご意見があったと思えます。実際出された再編案についても、11区については、たたき台ですが、もう1校減の扱いは、今、議論いただいた、もしくは確認いただいた、筑摩の件になりますので。それから、冒頭申し上げた生徒数から見ても、当面は現状をキープできるような生徒が、11区という線を引いてしまえば、境界をつくってしまえばできることは間違いない事実で、じゃあそう言うんじや、無風区で何も考えずにいいんではないかというような議論で終わりたくないものですから、結果何もしないということというのが結論であっても、プロセスとしてはすべての高校について今のままで本当に魅力があるのか、そのままで、これまで議論してきたような課題等がないのか、例えば小規模校化であるとか、それから今の子どもたちのニーズに合った、教育なり魅力があるのかというような観点で、少しポイントを絞って議論を進めさせていただきたいと思えます。

そのような意味で、大系線沿線なり、南安曇郡はなくなっちゃいましたので、要は、すべての高校は安曇野市ということになります。このエリアでいったん議論を交わしたいと思えます。どなたかご意見がありましたらお願いします。

(今井委員)

こちらの、中條さんのお書きいただいた文章の中に入っていますが、やはり今、専門学校というところの在り方というのを、もう1度考えたほうがいいのではないかというように思っています。ここにも書いてあるとおり、やはり穂高商業と南安曇農業というところを考えますと、例えば今農業をやっていくについても、やはり個人経営という、経営という部分がかかり入ってくると思うんですね。そうするとやはり商業的な科目というのも実習できるとか、たとえ農業ということを実際に職業にするにしても、やはりそこはもうちょっと科目を選択できるような仕組みをつくって、入ってからもある程度、自分がこう「ああ、これやると単位が」とかいうことの思いに、耐えられるような仕組みの学校にしていただいたほうが、何かいいような気がします。

たまたま南農と穂高商業というのは、南豊科、豊科、柏原、3つの駅が入るね。多分10分くらいで、電車であれば移動ができるという利点もありますので、そういったところを考えると、やはりジョイント校なりとかいうようなことを、仕組みが実現できればいいかなと思います。

(中條委員長)

事実確認からしておきます。南農と穂高の2校間の距離はわかりますか。

(西牧主任教育支援主事)

距離ですが、5.4キロメートルです。

(中條委員長)

5.4キロですね。最寄り駅は、先程、今井委員がご説明いただいたのでよろしいですか。

はい、わかりました。では、今のご意見を口火を今井委員さん切っていただいたのですが、今の意見を皮切りにでは議論ができれば深めていきたいと思います。

これまでの議論というか、これまでの県教委のご説明の中で、連携校、統合してしまえばひとつの取り扱いになりますが、連携校では転科はできない。科を変えることはできません。ジョイント校は転科が可能です、ということによろしいですね。

(西牧主任教育支援主事)

はい。

(中條委員長)

どなたか、ご意見がございますか。

(鈴木委員)

県が出していた資料1に基づきながら提案しますが、県の教育要覧によりますと、先ほど、ここにある7校の卒業生数は995人います。卒業生数といいますが16年度の在校生数ですね。16年度の在校生数。従ってこの生徒が、社会的な移動等がなければそのまま卒業したというように思いますが、995です。従って945からいくと、46名がこの枠には入

らない生徒ということになります。さらにここには、11区と12区の高校への進学者が書かれています。11区の私立、あるいはその他の区の学校、県外というのを足しますと、227名。995名中227名が通学可能と書いていいのかなというように思いますが、11区、12区に学校に行けていない、公立の高校に行けていないということですね。995名中227名が、2割強ですね。2割強の生徒が、11区、12区の公立高校へは行けていないということです。もちろん私立高校の魅力、特色を選んで行ったという生徒も大勢いるでしょうから、これは227というのを、そのまま南安の子たちが希望する学校に行けないということではないとは思いますが、高専もあるということですから。かなりこの数というのは高い。

私が先ほど、前回も言っていますけれども、あるいは今回も少し資料があるんですけども、大北の地区の子が、やはりキャパが少ないから南へ下りるわけです。しかし、田川や明科や志学館へはやはり行けないんです。要するに松本から乗り換えて、中央線を移動するというのは、やっぱりできないんです。なので、松本止まりなんですよ。

そうすると、南安の子はどうなるかということ、志望変更等が恐らく大北はしないですから、南に押されるわけです。要するに松本市を越えて、田川などには南安の子が、16年の学校要覧を見ると52名いるんですね。松本を越えて、村井駅まで行っている子が52名いるんですね。

やはり南安のキャパ、大北のキャパは小さすぎる。中條委員長が出してくれた数はあるんですけども、これもいわゆる平成14年から17年度のパーセンテージを乗していると、これだけの形になるんだけれども、今までの募集定員の決定が正しかったかどうかということについては検証できないわけです。「卵が先かニワトリが先か」というまとめ方をしていただいていますができない。ただ数字の、生徒の動きから見ると、やはり大系線沿線の高校のキャパシティーは小さすぎるというように思うんですね。

それと実は、筑摩の3学級をどうするかという問題と、それと都市部の大規模校をどうするかというあたりで、12区とも合わせながら考えて行く必要があるのではないかと思います。

（中條委員長）

ほかの委員さん、ご意見ございますか。

（今井委員）

今、鈴木委員の言われた内容が、私はよく理解できないのですが、私は1人子どもを育てましたが、私の感覚では、南安のほど、自分が行きたいところへ行っている所はないと思っています。それはなぜかといいますと、大系線1本で、北へも南へも出られるわけです。そういう交通の便から考えてみても、私は今、現状は子どもたちは、自分の本当に選択できる、自分の努力の結果として選択できる学校へ行けるという環境では、多分一番、松本などの高校と同じレベルで高いのではないかと思います。

ですからその結果として、南安のキャパが少ないというところの問題というのは、「ニワトリが先か卵が先か」ということはあるかもしれないですが、私は結果的に、結果論で今の生徒数に落ち着いたと思っています。

ですから逆にいうと、南安に、本当にもっと魅力ある学校、例えば進学校でいえば、深

志、県に匹敵するような学校がボンとあったら、そこにみんな多分行くんですよ。松本まで行かなくてもすむ。しかし、松本に残念ながらそのような進学校がある。そうすると、深志や県の状況を見ますと、結構多くの方が行っていますよね。深志 60、県が 69、70 ですよね。これで 130 名の方が行っていますね。

そのことを考えますと、そのところ、南安のところのキャパの問題というのは、やはり南安に生徒がたくさん学ぶというのが状況をつくりだすと言うには、そこに魅力のある学校づくりというものが絶対必要だと思っています。極端なことを言うと、南安の学校に魅力のない分だけは外へ出るというのが現状ではないかと思っています。だからここでむやみに、例えば過去と比べキャパを倍にしたところで、集まる生徒は倍にはならないというのが現状ではないかというように思っています。

（鈴木委員）

大系線という交通機関があるわけですから、確かに松本、大町、今後も行けるということで、選択肢は極めて広いというのが、南安の生徒であるということわかります。その選択肢以外の所に行かざるを得ないといいますが、行っている子どももいるということです。だから、46 名という、995 名が卒業していますから、46 名です。さっきも言いましたけれど私立、これはさっきも、誤解を招いてはいけいないので、もちろん希望して行っているという子も大勢いるとは思いますが、行かざるを得ないという子もいるんだと思うんですよ。

だから、乱暴に足すわけにはいかないんだけど、私立と、その他の区の高校と、県外と、さらに高校進学をしていない子を合わせると、227 という数字を言ったわけです。だから、多くの子が 17 校を自由に選べるということについては、南安の子は恵まれているし、それだけの数はなくても十分行けるということはあるんですが、そこに隠れている部分のことを言っているわけです。

先ほど、深志や県というような名前が出たので、私も誤解を恐れずに発言しますが、例えば明科が 27 名ですね。松本筑摩に 46 名ですね。梓川に 18 名、志学館は特色がありますから別にしても、例えば美須々に 56 名、こういう生徒が、例えば豊科高校が 1 学級でも増やした場合、どのような流れになるのかということを私は言っているのです。少し、ちょっと誤解を生むような発言になっていけないのですが。

（中條委員長）

大学進学だけが魅力ではないといった、そういう意見もありますけれども、やはり子どもたちにとっての魅力は進学もひとつの魅力だろうし、それからどういう企業に就職できるか、それから農業を継ぐ、林業を継ぐ、それからここにはありませんが水産だ、というのもやってみるという中で、やはり 2 つあれば、どちら側に行きたい、どちらがいいかというのは、これは当たり前の、子どもたちにとってどちらに行こうかというのは当たり前の論議だと思うんですね。

今日お配りいただいた資料でいくと、例えば先ほど今井委員から、南安の資料、交通というか地勢的には恵まれていて、北も行けるし、南も行けるという中で、確かに豊科、それから穂高の 4 中学は白馬まで、といっても穂高西だけですが、これは単年度だけです。

系列的にずっと見ているわけではなくて、これをもって断定してしまうのは乱暴だというのは重々承知ですが、これしか資料がないのでこれを見るとして、梓川、それから三郷、堀金でいうと、三郷、堀金の子どもたちが16年度だけですが、大北地区では池工、大町以外は行っていませんね。

ということは、これも誤解を恐れずにという言い方を律儀に、付けないといけないかもしれませんが、やはりそんな左側の高校を見たときに、大町の魅力があるから大町に行く、だけど大町北には魅力を感じなかったから、行かなかった。もしかしたら、その左側のほうに行っているかもしれない。やはりそれは現実、事実だと思うんですよね。かつ、この高校、ここにある高校というのは、都市部の高校を含めて、希望が減らなければ、学級数を減らしてない学校も実際ある中で、ほとんどが学級数をこれまでも減らしてきています。

これは前回確か、大北、南安については、どのような推移で学級数が減らされてきたかということもご紹介もありましたので、あらためてご説明いただくことは避けませうけれど、そのような意味では、どちらが先かは別にして、今考えるべきは、やはりいかに魅力を付けて、別に南安だけではない、どの高校もいかに魅力を付けて、逆に倍率を超えるような、定員数を超えるような希望者を集めるというのは必要だと思います。

ちなみに、これが全部の入学人数ではないですよ。大北だけだと思います。旧南安曇の中学生の入学人数なので、さっき出しましたが、この中で、旧南安曇の3校でも構いませんが、すべて募集定員はクリアしているのでしょうか。調べていただきたいのですが、学級数で見れば、南安曇農業高校は今3学級になります。それから穂高商業高校は4学級、それから大系線沿線ではありませんが、明科高校が普通科で同じく4学級、それから豊科高校は普通科で6学級というのが、現時点での学級編成になっています。

(鈴木委員)

穂高商業が、商業科会計科ともに102.5となっており南安曇農業は97.5、あとみんな100を超えていますから。これは、何回目かの資料ですがね。

(中條委員長)

それでは、事務局。

(吉江高校教育課長)

今お話しいただきましたように、南安曇農業の、ある科が97.5ということで割っておりますが、南安曇だけでよろしいですね。そうであれば、充足しているということで、ご理解いただきたいと思います。

(中條委員長)

では、篠ノ井線沿線も含め、明科はどうですか。

(吉江高校教育課長)

明科は98.8ということで、若干落ちております。

(中條委員長)

わかりました。充足率については明科と南安曇農業高校が、若干 100 を下回っている状況ですが、あとは満たしているということでよいでしょうか。

というのが現状だそうです。これまでの議論を踏まえて、もう少し議論を深めていきたいと思います。

ほかの委員さん、どうですか。どなたでも結構ですが、ご意見をいただければと思います。

(宮川委員)

今の議論は、前回、白馬高校に魅力のある学校をということで、魅力の提案をみんなでしたんですね。本来魅力のある学校、例えば今度、大町北と大町が一緒になって、なお以上に、進学率ばかりではないんですが魅力のあるものにすれば、南安曇からも行くと思うんですね。

現状に木曽高校に「進学」という魅力があって、電車の通学でいきますと、私どもから見ますと、岐阜県に行ったほうが電車の本数も多い、非常に環境的には恵まれています、我が中学校は木曽高へ行くんですね。そこに魅力があるから行くんですね。

ですから、今の議論で、生徒がみんな入れる選択肢を広げるというのも大事かもしれませんが、ここで論じた高校に例えば松本からでも大町に行く、そのような魅力をどうやって付けるかというのが、この我々の協議の内容だと、最初から私はそのような言い方をしているんですが、また数字に戻ってしまって、また今の同じ議論をしている。

これではあまり進歩がないと思うんで、本当に例えば多部制のところの魅力は何、あるいは総合学科の魅力はこのようなものだとしてきたということですよ。では進学でいった場合、松本深志と蟻ヶ崎ですか、私はよく知りませんが、みんな進学校だったらではどこに魅力があるのかと。そしたら大学の高いところに行けるのが魅力だとすればその高校にあると。あるいは低いところでもいいと思えばそうなるということで、ではその魅力をどこで求めるかと。

そのようなことなので、もしそういうことで魅力が一緒だったら、県も深志も何も、学級数が増えたって1つの学校になったっていいと、そのぐらいの観点で魅力をもっていかなければ、本当の意味の高校や子どもたちがチョイスできる、そのようにならないと思うんでね。

今もその大系線沿線の話はもう何度も聞きましたけれども、これはもうどう考えても、生徒がそっちへ行くかと言ったら、魅力があれば行くと思うんですよ。だから魅力がないから行かないと割り切れれば、ではどうしようという話に進んでいくと思うんですがどうでしょうか。

(鈴木委員)

私の問題提起はそうではなくて、魅力があるとかないとかということは、今、具体論になっていますから、それは申し訳ないけれど置いてあるわけですが、大北地区が7割しか募集定員がない、それらはいったい問題ではないのかということで、今まで調べてみてもよくわからない。でも今回のところで見ると、南安の生徒がかなりの部分出ている。

それは魅力があるから出ているのかもしれないんだけど、ではみんなにとって魅力があって出ているかということ、先ほど「誤解を恐れず」といった学校などについてはどうなのかということなんです。もし南安に、例えば豊科にもう1学級2学級のキャバを持っていれば、やはり地元が良いという生徒もでてくるのではないかと。子どもたちが松本まで出なくてもすむような環境があるのではないかと。そのことと、実は大北の少ないこととも影響しているのではないかと。

もちろん松本市内から安曇に出てくる子もいますし、行ったり来たりはあるんだけど、大きな流れで見ると、大北が南安に行き、南安が松本に流れ、それだけで止まらなくて筑摩に上がり明科に行き田川に行くという、そのような動きがあるのではないかとことを言っているわけです。

(今井委員)

鈴木委員さんの言うことはよくわかります。基本的にやはり、明科はちょっと別にして、大系線沿線3校の中で考えますと、やはり普通科が豊科高校しかないというのは、やはり問題だなと思っていますよ。正直言って今、松本とか田川も含めて、普通科なんですよ。それで普通科を求めて出ていくという図式は確かにあります。だから、どっちかということ、学校は豊科、大系線沿線に3つありますが、やはり専門高校、農業高校と商業高校という比率があまりにも高すぎるというのが、実態としてあるわけですね。これはやはり松本市内の専門学校ということを比率的に考えてみても、ちょっとそこは南安で抱えている専門学校とうのは多いかなという感じがしています。

だから逆に言うと、正直な話をすると、南農に穂高商業の機能をくっつけてしまって、1校として専門学校を継続。それで、穂高商業を普通科に衣替えするくらいのことを考えると、今の外へ出て行くというところは、かなりそこは押さえられるかなと思います。

ただ、そこはやはり本当に、確かに今のお話ですと、南農も穂高商業も定員はちゃんと充足しています。だけど、それ以上に穂高商業が普通科だったならば、もしかするともっとそこに生徒が集まるかもしれないですよ。ということで、そのような衣替えを考えて、高校というものをここで再編していかないと、本来の、今、鈴木委員さんが言われるような、理想的な形には多分近づいていかないのではないかなというように思っています。

そこはやはりキャバとかという問題じゃなくて、私も一番最初から言っていますが、では専門学校って、今、本当に、中学生から見たらどのくらい魅力があるんだろうということが問題になってくると思います。それで、過去に丸山先生とか長谷川先生から、若干それに関しては、やはり中学生の場合には、基本的に普通科に進学したいという希望を持つ生徒さんが多いですよというような発言も、確か前にあったかと思っています。だからそのところが、ちょっと今、定員の割り振り方が、「農業高校や林業高校というものを存続させなければいけない」という「大人の論理」が、あまりにも先行してしまって、そこでちょっとバランスを欠いているところが出ているのではないかとこのように、私は思っています。

本当はここで、本当にその専門学校の在り方というのをもう1度しっかり論議していただいたほうが、何か魅力ある高校づくりという面では、一歩近づくのではないかなというように思っています。以上です。

(鈴木委員)

ひとつお聞きしたいのですがよろしいですか。

例えば豊科から大町市内というような流れというのは、やはり南に流れるという状態ではあると思いますが、あるいは距離の関係もあろうかと思います。「北への流れ」についてお伺いしたい。

(今井委員)

北への流れの現状は、多分、今、高校生を持っているような親御さんの世代ですと、やはり大町高校って結構魅力ある学校なんですよ。「質実剛健」というような意味合いも含めて。

結構これを見ても現実に、大町へ進学していく生徒さんが 32 名、それと大町北へ行く生徒さんが 14 名ということで、いわゆるそこに何か魅力を感じているようなところがあると、やはり生徒さんは行きますよね。

というように理解しています。だから基本的に南と北を見て、では自分はここかなと思うと、やはり大町を選択するとかいう可能性のほうは結構大きいというふうに認識しています。

(中條委員長)

数については、前回の白馬についても、80 名の定員に対して実際の入学数が 69、かつ地元である白馬中学、小谷中学でいうと、小谷より白馬のほうが少なく、合わせて 42 名。それで、佐野坂を越えてどうしても行ってしまふ。

それは、そこはたまたま充足率の問題になりますが、どこの学校もやはり同じだと思うんですよね。やはり魅力があれば行く。そうすればやはり、いかに魅力を付けるかということ、抽象論かもしれないけれども、それをいかにその具体論に変えるかということやはり考えてもらうしかないし、そのときに、過去の経緯でいうと、私も耳学問なので正しくないかもしれませんが、穂高商業は、松本と長野に古い商業高校があり、かつ、松本は私立であって、市内に県立をつくらずに、やはり周辺校に置いたというような過程があったというように、誤って居たなら訂正しますが、聞いていますし、農業高校は、必ずしも南農だけではなくて、かつては幾つか農業校があった中で、結果としてこのエリアに残っているのが、今は南安曇農業だけということですから、そうしたらその後は、市内に集中しているのはあるにせよ、県立高校ですから、都市部だけにつくろうと思ってつくったわけではなくて、バランス感覚という嫌味にしか聞こえないかもしれませんが、やはり県立である以上は、ある程度そこにいる子どもたちの数を考えて、一市町村に集中しないようにある程度置いていくという経過の中でつくられてきたということではないかと考えもあったと理解しています。

そういう意味ではやはり、学校数が、南安だけ削ってきた、もしくはその部分だけ少なく現時点で学級数を削ってきたのであれば、そういう議論があるかもしれませんが、都市部校も含めて全体として、生徒数の減少がきていますので、これが 1、2 学級多いから逆流も多いかということには必ずしもならないし、逆に 1 学級増やさなくとも、魅力付けをすれば、翌年翌年の倍率が多分それを物語って、その結果何年かの積み重ねが、今 4 学級し

かなくても5学級になり、5学級しかなくても6学級になるということで、そこは事務局である県教委側も見ていくだろうと思います。

そういうことで結論付けは出ていませんけれど、多分今後同じ議論が続くとちょっと疲れますので、1時間半近くたちましたから、ここで休憩にしたいと思います。40分再開でいきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

【休憩後再開】

(中條委員長)

では全員そろいましたので再開させていただきたいと思います。

では、先ほどの議論の続きになってしまうんですが、いったん先ほどのご意見の中で、例えば南安曇農業高校と穂高商業のジョイント校か、それから、穂高からむしろ専門高校をどちらかに寄せて、普通科高校が、南安曇という地区で見た場合には少ないのではないかとということで、例えばですが、穂高商業が例えば普通科高校になるだろうとかという。

数はちょっと別、学級数等々は別として、前提としては先ほどもご意見もありましたけれども、いかに、やはり魅力づけをしていくかというようにいけば、すべての高校数に当てはめると、豊科高校にせよ、やはり中核高校、今は1校しかないわけですから、中核高校としての魅力はどうかとか。それから明科高校も、沿線という意味では外れますけれども、そこに書いてありますように市、安曇野市という中には、今4校ありますが、人口が9万9千300しかいない。塩尻市が6万9千人。塩尻には公立高校が2校、ただしそのうち1校は数10メートル南へ行くと、もう松本市ということで、そういう塩尻に普通科高校は2校しかない。それから私立は1校ということですから、それで3校になるということになると思いますが、それに対して安曇野市には4校あるという、先ほどの地域の魅力づけという観点から、そこを中心に魅力づけという観点を中心に議論を進めていきたいと思います。

やや意見が特定の委員さんに集中したきらいもありますので、ぜひ後半については、まだご意見をいただいていない方からも、木曽から見てとか、佐野坂のほうから見てで構いませんので、ぜひご意見をいただければと思います。

よろしくお願いします。

(長谷川委員)

よろしいですか。

先ほどの続きになってしまうかもしれませんが、私は松本の外れの菅野という学校で、松本空港の近くなんですが、ちょっと地勢も独特なところがありまして、松本方面にはバスなどで通えたりする学校なんですが、ただ距離は結構遠くありまして、どこの高校に行くにしても、結構大変な場所なんですが、一番近くて田川高校だと思いますが、必ずしも都市部というように限らない例が、最近やっぱり豊科高校が比較的人気がありまして、私もおとしですか進路指導をしたときに、松本の高校と豊科とどっちにしようかというように、現実に関心を持って悩まれている子もいますのでね。最終的に豊科に決めて、そちらの

ほうに進学していった子がいました。

たまたまこれまでの、不合格者数の推移のデータがここにありますが、平成 12 年まで、豊科高校不合格者数ゼロとあるんですね。それで 13 年に 9 名になって、14 年 23 名になって、15 年に 48 名に増えて、16 年は増えて 60 名不合格者が出ていて、最終的に 17 年、昨年は 36 名に少し落ち着きました。

もうひとつの話として、白馬中出身の先生がたまたまいらっしゃって話を伺ったら、前回に戻ってしまうかもしれないのですが、白馬のあたりの生徒というのは実際どのように考えているんだろうと。それで、聞いてみると、進学したいということであれば、どうしても無理をしても大町に行くというように、何となくこう決まるような雰囲気があると。で、そちらのほうに行ってしまうということがあるということなのですね。

白馬高校の魅力づけということで、前回議論があったとおりで、なかなか、大変なところだと言いながらも工夫されているところはあると思いますが、結果としてはやはり大町を含めて豊科という、以前鈴木先生がおっしゃっていたエリアから見ると、やはりおっしゃるとおり普通科のところで、大体足りているかという、足りていない可能性もやはりあるかなという気がします。

豊科にこのように人気が集中可以できるということは、逆に言うと都市部でも、遠くの所でなくても、人気、魅力を持たせる可能性があると思うんですが、それが何かという言葉に表現するのはなかなか難しいことだと思うんですね。

一点はやはり、入学者の推移で決定してきているところがありますが、本当に希望して、大北に行きたいから大北に残っているかというところではない可能性が、やはりちょっと否定しきれない可能性がある。豊科止まりではなくて、松本に来るわけなんですけど、今度、では松本のほうではどうなっているのかという、昨年在諏訪地区に 134 名が流出していますね。

ですから、きっかけはどうなるかわからないですが、何となくもう「スパンスパンスパン」はずれていって、諏訪の辺りでは 2 次募集に結構集まったりするもので、そちらのほうに流れて、2 次募集でかなり合格していただけたところもあったりするんですが、イメージからすると、何となく中学生って、「ここではないどこか」といいますか、「地元だと...」というものがあり、違うちょっと遠くの、通える範囲だったら別の地域のほうがいいなというイメージを抱きやすいところもちょっとあるのかなということを、進路指導で感じたことがありました。こういう流れというのは、やはり大きく分けちゃって事実であるというように思います。

それと加えてなんですが、穂高商業は昨年 19 名不合格者が出ましたが、非常に不合格が多かった所で、やはり話を聞いていると、もちろん松商が松本にありますので、商業系ということも含めて、ただ松商の魅力というのは商業のことだけではなくて、やはりスポーツであったりとか、いろいろな意味のメリットがあって行っている子も多いんですけども、やはり公立の商業科に行かせたいというお宅も結構多くて、半分、まあ地域的な問題だと思いますが、その意味でいうと、先ほどのジョイント校ということになってくると、やはりちょっとニュアンスが変わってきてしまうかなというような印象も逆にあります。だから、一点は普通科に限定したときに、確かに大きな流れがどうしても否定できない流れがあって、それが非常に今、進路指導の中でも苦労しているところがあると、これは事

実です。

それともう一点が、やはり学科としての特徴というのは、確かにそのような意味でいうと南農については、出口のほうで見ると、農業系の大学であったりとが行っているところについては、結構減らしたりはするのですが、では全員が本当に農業科に行きたくて行けているかどうかかわからないところはあると思うんですが、ただ学科としての魅力と、その編成のバランスとか総合的に考えると、その2つの大きな流れというのは、どうしてもあるのかなといった気がして、話をお聞きしました。

（中條委員長）

幾つか質問します。長谷川委員の推測で結構ですが、豊科高校が最近、ここ4、5年、人気が出てきたという背景は、どんなふうに思われていますか。

（長谷川委員）

私はやはり本校の状態しかわかりません。きっかけになったのは、何年か前の卒業生で1人、松本市の4校のうちの1校に行くか、それか別の、そこがどうも点数的に厳しいなということで、どうしようかということを考えていたときに、豊科の話を聞いて、それでまあ体験入学とかしていくと、ずいぶん雰囲気も落ち着いていて、以前ちょっと話をしていたんですけど、すごく雰囲気が落ち着いていて、なかなか、自分にはひょっとしたら合っているかも知れないということで、学校参観もして、そのお子さんの話を聞いたりとか、まあその辺の話もだんだん聞いて、うちの学校からだ豊科を選ぶという生徒が、だんだんと年々増えてきているという感じはあります。

ですから、魅力って難しいんですが、やはりこう雰囲気が合っているなということと、安心して通えそうだなという、何かそういうところは、ちょっとはあったように感じましたね。

（中條委員長）

それから、すいません。ちょっと意味が不明だったんですが、仮に穂高と南農をジョイント校化したときに、イメージとしては、商業科ニーズ、その進学ニーズのある中でジョイント校化したときに、イメージが少し変わってしまうのではないかとおっしゃられたんですが、この意味はどういうことでしょうか。

（長谷川委員）

意味は、要するに両方の学科を、学科というか、教科として選択して単位が取れば、確かにそれでオーケーということもあるかもしれないんですが、やはり農業科と商業科を一緒にして、学校をひとまとめにするというのは、ちょっと乱暴な感じもするなというところがあると。公立の商業科というのは、例えば大北のほうでも、商業科の問題が出ていましたが、ニーズがある中で商業科を残さないというのは、ちょっとまずいんじゃないかなと思います。

(中條委員長)

ジョイント校というイメージは、商業科に入って、商業科で卒業することも当然可能だし、2つの中で希望すれば、そうした専門科目を選択することができる。たまたま先ほどのご発言のベースでいけば、農業ベースにしたときに、例えば経営というところも必要なので、そういった勉強もできるというメリットもあると。それから希望すれば、転科も可能だということだったと思うのですが。

ではジョイント校になった両方必ず勉強しなければいけないということではないです。今のままで、商業科をずっと選択する、農業科をずっと選択する、もしくはその両方を、もしくは途中で進路希望が変われば、その範囲内での枠にはなりますが、転科することも可能という、自由度あたりが出てくるという理解でよろしいですか。

(宮川委員)

今の点について先生にお聞きしたいのですが、例えば穂高商業という名前だからということ、というのはないんでしょうかね。例えば今、木曽で問題になっているのは、木曽高校が木曽山林高校と一緒になるから、中身は同じ授業体系を組んでも、それでもいやだという話が出るので、やはり穂高商業という名前というのに、ジョイント高校で、穂高なんとか農業商業高校では、子どもたちの魅力を感じさせないものがあるんですよね。これは誰にも伺ったわけではなく。

(長谷川委員)

誰にも伺った話ではないので、推測でしかないのですが、職業科を選ぶ過程といいますか、割と堅実にというか、必ず手に職を付けて、例えば何かの免許をもって、行ってほしいというところがあって、イメージの問題ではそれだから言えるというのは、ちょっとわからないですね。

(中條委員長)

せっかく「安曇野高校」だ、安曇野市になったから、「安曇野総合高校」といったような「安曇野ブランド」を使わない手はないですね。穂高もいい学校だと思いますが。

(小林委員)

今の学校の名前のことですが、名前がもし変わってそのままいけば、何年かすれば定着していくという言い方は悪いが、そうなります。でも、その出身、あるいは地域にとっては、名前が変わるといっては、少し寂しいですよ。

例えば先ほど委員長さんのほうから、塩尻高校の話が出ましたね。うちは朝日ですからそこから通う方は非常に多いわけです。ところがこの校名が、最初は「桔梗ヶ原高校」で卒業した人、次に変わって「塩尻高校」になったと思うのですが、名前が変わったということで、やはり抵抗を感じるんですね。自分のうちがなくなったというような感じを受けるのです。

ですから、私だってジョイント高校で、名前じゃないかとか言うが、その地域の人たち、あるいはそこを卒業した人たちは、そうじゃないです。すごく抵抗を感じる。そういうこ

とだと思えます。そういうことをよく、あちらこちらで名前が変わった場合にはよく言っています。ですから、さっき言ったように定着でもしていけばね、「昔はこうだった」なんて言うけれども、非常にそこに抵抗を感じるのだと思えます。

それからもうひとつ。先ほどから出ている安曇の関係の普通科の問題ですね。これは今、今井委員さんからも出ておりましたが、安曇と穂高商業というところを見ていくと、やはり農業関係が非常に多いという話が先ほどから出ております。それでやはり普通科という考えを取り入れたらどうかということを、先ほどから話を聞いているわけです。

たまたま学校で進路指導をしていく中で、今と前とは、社会情勢が変わっているものですから、その辺の考え方を私たちも変えていかなければいけないということです。ということは、自分たちが卒業して高校へ行く頃は、高校へ行くよりも就職する人たちのほうが多かったですね。そのうちにだんだん変わってきて、高校を出たという、そういう知識だけは身に付けておかないと、というようなことから、または、社会情勢も変わり、高校へ行く人たちがたくさん出て来たんだと思えます。

少しずつ社会情勢がいろいろ変わってくるものですから、例えば農業が中心になる場合では「農業高校をつくりましょう」とか、「商業高校をつくりましょう」という形になってきて、中学を卒業したら、農業後継者。商業高校を出たら、商業を継ぐなり、あるいは大阪へ行って少し修業をしてくるだとか、そのような形でもって商業科というのを選んでいったんだけど、今の時代になってくると、生徒と話をしている中では、親の考えも、高校へ行って普通科3年間出ておいて、その3年間の間に、これからは大学や短大や専門学校を出なければ駄目だというようなことから、3年間の間にまた考えて、進路決定していくという形が、非常に多くなったのです。

ですから、商業科、農業科をたくさんつくるよりも、やはり普通科というものに生徒、家庭も魅力を感じているということを強く思います。詳しいことはわかりませんが、この通学区でいうと豊科にしる、明科高校にしる普通科をつくったと思うんですね。ところが、地図の上から見た場合には、たぶんいい配置にはなっていると思うけれど、通学ということから考えたり、あるいは地域性ということから考えていくと、多少、今でいうと不便を感じるところがあるんじゃないかと思うのです。

ですから、もう一回普通科をつくるなら、つくるでもって、いろいろな条件を加味して検討する必要があるんじゃないかということを思います。

以上です。

(中條委員長)

最終的には、交通網の整備等々、現状を踏まえて、何十年からにしても、百年前からにしても配置は別として、長谷川委員からのことも含めての高校再配置、減らすというか、学科、学科の再配置を考えたほうがいいのかというご意見でいいですか。

(小林委員)

再配置を考えていけば、減らさなければいけないところも出てくるだろうし、逆に増やさなければいけないところも出てくるかもしれない。もう一回考えましょうよ。

(中條委員長)

はい。わかりました。ほかにご意見はありますか。

民間企業だけで世の中が成り立っているということは、ある一面でしかないですが、今、社会的に求められているのは、ただ、「どこどこを出てきました」というよりは、最近流行りの言葉ですが「ビジネスプロフェッショナル」という訳のわからない言葉が対応しますが、専門性をいかに身に付けているか、その点であると思うのです。会社に入ってからなんですけれど。

そういった意味でいくと、大学を出てきてから、またわざわざ専門学校に行って、場合によっては資格を取るという学生さんも増えてきているので、単に普通科、今、中学を卒業した時点でなかなか進路選択ができないので、3年間の中でもう一回考えよう、それは全然否定しませんが、その後、やはりいかに専門性を身に付けるかということは、むしろこれからもっと重要になってくるでしょうし、そういう意味で単に大学で勉強したよりは、だいぶ前に宮川委員がおっしゃっていましたが、高専で物作りをやってきたほうが、もしかしたら、魅力的な人材、採用ニーズが高まっていく可能性があるように思うのですが。

大昔、デンソーさんに伺ったときに、あそこは企業内に高校を持っていっぱいいます。中学を卒業して百何十人いますが、技能オリンピックに出るために、あそこは、ほかはだいぶ下火になってきましたが、今に至っているのですが、物作りをずっと教えている。そこは本当に地元の、トップクラスの進学校に行けるような子たちが、本当に何倍、十倍近いような希望で選抜されて、何年間か高校資格取りながら、社内高校として取りながら、物作りの先端に立つ、リードする人材を育成するというようなことをやっていますので、普通科だけが決していいとは、基本的に思っていないので、ただ進路選択という段階で中学卒業の15才ですべてを決めるというのは、確かになかなか難しいかなという気はします。

ほかに、まだご発言いただいていない方中心ですが、いかがでしょうか。

(野口委員)

今、言われたように中学卒業時点で自分の進路をしっかり決めて高校に入るということはないと思うんですね。それで高校生から聞いた言葉の中に、高校へ入って1年たったところで、僕はこういう方向へ行きたいというふうに思ったときに、すぐにこれが変えられないから、職業校というんですか、そういう普通校と職業校のジョイント校ならかなうかもということで話を聞いたのですが、そんなふうに進路をそこである程度方向付けができたらいいなというような考え方で、私は理解しています。

(中條委員長)

この延長線上で考えていくと、みんな普通科高校になっちゃいますね。

(藤本委員)

違う観点といたしますか、ここでお話しさせていただきたいと思うのですが、例えば農業高校についても、今回では、確かに農業の人口が今どうなっているのかわからないですが、定年後に農業をやる方というのが非常に多いそうですね。そういったときに指導者というか、そういった者がやはりいないといけないと思います。

そのように考えていくと例えば、拠点校といいますかね。4 通の中に農業校専門高校というか、そういうものがあると、そういった指導者という者を見いだせるということがあると思います。そういった意味で各通学区に、そういった高校をどのように配置するかというようなことと、今、例えば安曇野市の穂高商業と南安曇農業のジョイント校ということでも関係すると思うんですね。拠点校というか。ジョイントをやると薄くなっちゃうという議論を聞いたことがあるんですね。総合学科にすると、専門性が薄まっちゃうということを聞いているんですけども。拠点校という考え方もやはり考えていけないといけないのではないかなと思いました。

もうひとつは、高校生によっては、普通科の場合座学が多くなりますが、そういったものに耐えられないと、耐えられないというか、そういった、いわゆる体を動かしたりする、そういったものを通して高校というものに、魅力というか、行きたいという気持ちを持つ生徒もいると思うんですね。そういった意味で、こういった学科というのは必要なんじゃないかなというのは、やはり考えていけないといけないのではないかと、ちょっと、まとまらないようで申し訳ないですが、以上でございます。

(中條委員長)

総合学科になったときに、専門性が薄まってしまう、専門校に比べて薄まってしまうということでしたけれども、ジョイント校でもそういうようなきらいがあるんですか。

(藤本委員)

ちょっとわかりませんが。

(中條委員長)

現時点で長野県ではジョイント校はありますか。

(吉江高校教育課長)

まだないです。

(中條委員長)

ないんですか。はい、ありがとうございました。

だいた前に言った、ニーズという観点からだけ見てはいけませんが、それも中学 2 年生のアンケート、中学 2 年生の希望調査、あれで単純に計算したところ、確か、農業科で 1 学級分ですか、商業科だと 1.5 学級分というような、単純な数字が出てきましたので、ただ世の中は方向的にはアグリビジネス参入等々、それから小規模より大規模農業構想的な動きもあるか、あとは長野県の地域特性として、食品加工業等の中心地区等も含めてありますから、バイオにつながっていくようなものが、農業学科につながるのかどうか。

それから商業高校についても、さっき言われたような経営、普通科を出てきて勤めるくらいだったら、経営とか簿記の一つでも身に付いていたほうが、よっぽど魅力があるんじゃないかなと、私は個人的に思います。専門高校の魅力だとかということもやはり考えていく必要があるだろうし、一方で実際のニーズと、それからやはり、なかなか進路選択を

中学のうちに難しければケアをすることを全部普通科にして、3年間でしっかりキャリア教育、キャリア研修というんですか、それをやって身に付けさせたほうが、参画させたほうがいいんじゃないかというご意見も、やや極論的に言えば、数学は普通科でいいんだということになりかねないのかどうか、その辺も踏まえて、あまり抽象論になってしまっただけとはいけないのですが、この地域には、農業高校、それから商業高校もあり、それから普通科高校は大系沿線上には1校、ひとつの新しい市として見れば、篠ノ井線にはありますが、これも1つある。そのことも考えて、ほかにご意見等があればお願いします。

（今井委員）

私は企業の人間ですので、なおかつ非常に採用にかかわっているところでいます。今、微妙ですね。企業が高校3年間での専門性というのを、どのように評価するかということも、若干知っていただきたいのですが、現状、今私どもの会社で、経理が6名いますが、高校の商業科というものではないです。全部大学の経済を出てきた人間がいます。

要するに、商業科で学ぶという、高校レベルですと、どうしてもやはりその場の処理というところでは、授業で教えてもらったりとか、そこまでしかないんですね。今、実際にそういう部分というのはある程度データにインプットすればコンピューターのほうで勝手に処理をしてしまいますので、あまり正直に言って高校のレベルで教えてもらうところを、本当に仕事に生かすぞという部分というのは、正直に言ってあまり範囲がないのです。

もっとそれより必要なのは、その数字をどうやって判断して、経営に結び付けていくかというところが、商業科とか、経済というところで求められている能力なので、その辺がもう、昔の商業科がつけられたときの環境と、その卒業生を使っている企業の中で、すでにミスマッチが起きているという現状があります。

それと農業についても、非常に大規模なトマト栽培のハウスというか、工場ですね。こういうものがあります。じゃあ、こういうふうになったときに、今の高校で教えている農業の手法が、いつまでも続けるのかという問題がやはり出てくるので、いずれにしても、そこで違う観点で植物を育てる、いわゆるバイオの技術を導入するというようなことも必要なんですね。

そういったときに、今の体制の中でそこまで、授業の内容を変えていけるのかどうか。将来、専門学校のある在り方というのを。私は、専門学校というのは、ある部分は必要だと思いますが、私が言っているのは、大系線沿線上でそのうちの2校を抱えているのは、ちょっと課題だねという意見を申し上げている。でも、全体の専門学校というところを残すにしても、やはりそこはものすごく大きな課題を専門学校自体が抱えているのではないかという認識はあります。ちょっと特に高校の再編とか、そういう問題ではないんですけども、中身の問題としてそういう部分が現状、求められてくるのではないかと、そういうふうに認識しています。

（中條委員長）

一方で、機械工学科卒といいながら、パソコン上で、CADですが、コンピューター上でしかやったことがなくて、旋盤に1回も触ったことがないような機械工学科卒業生が、ややもすると増えていきますから、そういうところは、私自身問題を感じていて、それを大学でしっかりやってくれればいいのですが。

(今井委員)

それはあまりにも頭で考えてしまうんですね。

(中條委員長)

そういう意味で、高校にせよ、生きる道といったらちょっと大げさですけど。専門性と言う意味で専門高校の生きる道というか、変わっていかねばいけないという意味で申し上げました。

ちょっと、話しが広がってきてしまったので、もう少し、安曇野に絞って、ご意見があれば。今日で結論が出ませんので、もしなければ、とりあえず課題提起をしていただいで、次のほうに進めていきたいと思います。まだ時間はありますので。

(鈴木委員)

今井委員と私にくぎをさされてしまったというようにと感じたのですが。今井委員が発言されたので...

私の、蘇南高校でも商業科があるんですけども、商業科で事務を取る仕事に就くというのは非常に難しいんですね。それで、そうやって言うと、電気科であれば電気科指定で求人がくるということで聞けば、ある面では、物作りというようなことのニーズというのは、まだ人の手が必要だということなんかではあるだろうと思います。

私が言いたいのは、ちょっと広がりすぎたという話しになったことについて、そのとおりになってしまうのですが、今、要するにキャリアというような問題も、学校の現場では問題にはしているんだけど、高校進学率が 97、98 といったときに、先ほど、藤本先生も言われたんですが、やはり座学でずっと 6 時間座っているということではなくて、実習をとおしたり、作業をとおしたりして学んでいくという、そういう生徒もいるわけですね。

それで、我々は昔からそんな言葉で言っているんですが、例えば「商業を学ぶ、農業を学ぶ」というのを、「商業で学ぶ、農業で学ぶ」そういうような観点もあって、さらに南農の統計にも確かあったかと思いますが、あるいは系統の統計でもあったんですけども、何人かの生徒はその高校でやった専門教育をさらに上級学校へ行って高めたいというような、そういう進路の選択もあるということで、やはり拠点校といいますか、農業高校もやはり必要だろうと思うし、商業高校も必要であるのではないかなと考えていまして、私が前半で言ったのは、今度は委員長の意図に沿うように話をしたのですが、候補案では、筑摩高校の全日制 3 学級を募集停止かけるというふうになっていたんですね。

その部分で、私は問題意識を持っていたわけです。120 人の受け皿といいますか、入れ物がなくなるということは、ただでさえ今、7 とか 8 というのが市内の 4 校なんですね。そこにまた持っていくのかということで考えたときに、ほかの高校もあるんじゃないかということで、最初は大北の 7 割というのに問題意識を持ったんです。次にじゃあその子たちがどう流れるかというのに問題意識を持って、南安に問題意識を持った。

それと、筑摩の 3 学級は、先ほど事務局は市内とは言いませんでしたが、ばらまくと言われましたけれども、例えば、第 1 回目の資料で見みると、前期選抜の志願率でいいますと、豊科は 3.15、大町高校 3.58 という形で、17 年度ですが、松本市内校を上回るような志願者がいるんですね。そういうことでいうと、私は筑摩の 3 学級募集停止について

も、自分自身は意見がまだ決まっていますが、ただ多部制・単位制を筑摩に入れるとすれば、やはり全日制課程と、定時制課程の単位制、あるいは多部制が併置されるということは、なかなか難しい問題があるんじゃないかなと思うんです。

ということで多部制・単位制のことを考えて、筑摩の昼間定時制の80名については、いつも満杯になっているという、80名の募集に対して、いつも100パーセントになっているという状況になっているという状況を見ればニーズがある。ということであれば、その子たちの環境を整えるには、場合によっては筑摩全日制の募集停止というのは、やむを得ない線なのかなという思いもあって、まだはっきりはしていませんが、そうした場合にその120人はどこへ行ってしまうのだろうというのを考えたときに、大系線問題が出てきた。こういう話なんです。

これで終わりますけれども、こうすれば候補案の具体的な話しになるのかなと思います。

(中條委員長)

鈴木委員がおっしゃったのは、筑摩3学級分をどこへ持っていくかのときに、普通科配置から見て、大系線沿線南安が少ないと思ったということから、そこに、学校変えれば、学級数を減らすかという可能性というのを。

(鈴木委員)

そういうことです。

大北が押してきていますから、大北にもというところがあると思います。

(中條委員長)

今の件でお話しますが、先ほど長谷川先生が言っていました、諏訪・岡谷の7区へ130名でしたか、行かれていますと、諏訪へ勤務していましたが、塩尻近辺から岡谷なんて、松本へ行くよりかえって早いくらいなので、やはり「水は…」とは言いませんが、松工に行くのなら岡工のほうがはるかに近いですけどね。それから、松本駅で降りて、北か東かわからないけれども、20分歩くことに比べれば、岡谷駅から15分くらい歩いた普通高校のほうが近いと思いますね。それは特に、私も調べたんですけども、塩尻地区の中学校が割と諏訪・岡谷地区に行っているの、11区でも北とかのほうから、かなり諏訪・岡谷ということころでは、確かなかったと思うし、もし数字を見て違ったら、次回で構いませんので、事務局のほうでご準備ができればと思います。

それでは、話を戻しますが、普通科というときに、確かに大系線という1本の線から難しいかもしれませんが、明科高校の話題が何も出て来ないのが個人的に非常にさみしいんですけども、魅力が十分あるから、いいのではないかということなのか、やはり、あそこはいろいろなケースがありますが、それからホームページを見ると、普通科のスポーツコースというのが、確かあったんですが。あれはどういう中身になっているか、わかりませんか。それが、この場合にスポーツをやっていて「良い」ということですかね。

たぶん、明科は明科なりに工夫していると思うんですけど、今のままでいくと、学級数で見ると、普通科高校といいながら、篠ノ井線ということもあるかもしれませんが、第11区でいうと少ないほうになりますので、この辺を魅力としてどうなのかという、少し個

人意見なんです、スポーツコースというのがあったので、どのような課程で行っている、か等、もし次回あればお願いします。

ほかにご意見ありますか。

では、区で境界線で移動禁止ということではありませんので、当然絡んできますけれども、先ほどもいろいろ話もありました。

それでは次、都市部高校ですね。都市部校についてとういのは変ですが。ここで言うのは、いわゆる松本市内の高校ですね。ここはこのままでいいのかどうか。確かに学級数でいうと、深志が8学級で、残りは7学級ですね。ただし、県については英語科1を含んで7学級編成ということになります。ちなみに、田川、豊科は6学級になっています。梓川は4学級です。都市部校に関して、魅力、いわゆる魅力ということでもいいのかどうか。

藤本委員は言いづらいと思いますので、後に回させていただきます。いや、何かあればお願いします。

個人的にはちょっと極論めいたものが入っていますが、それは後ほどにしたいと思います。

百瀬委員、何かありませんでしょうか。

(百瀬副委員長)

私もかつて、松本市内の高校に2つ勤めていて、いずれも普通高校であります。そういう中で先ほど来、大系線沿線からの松本方面への進学者の問題が出ておりますが、結論から言いますと、今までのずっと歴史的な経過といいますか、生徒の動向、あるいは親の考え方とか、そういうものからして、今、県教委のほうから出されている、候補案というような形での、学級数なりというのは、妥当なところなのかなというようなことを思っているのです。

しかし先ほどから、中学生は「普通科指向」ということが非常に多いというようなことを聞いてはいるわけです。確かに、そういう状況はあるかと思います。そういう意味では、学科編成の問題とか、そのようなことも確かに議論にはなるかと思いますが、松本市内の現在の普通科の状況については、この辺が妥当なところなのかなと、こんなことを感じております。

それから、もう一つ言いますと、大町地区の問題。ちょっと飛びますが、大町にも、私は勤めていたことがございます。大北地区の生徒、あるいは保護者の皆さん、地域の皆さんの考え方の中に、「南志向」というのが、確かに強いといいますか、あると思います。それから、南のほうからすれば、やはり松川を越えてあるいは池田を過ぎると、冬、雪の量がかなり違うわけですね。そんな点で、魅力があればその学校へと、北のほうへと行くだろうと考えたいのですが、なかなか、その辺はやはり、必ずしもそうではない部分のような気がします。

そんな点で、今の募集定員学級数の配分も、今までの歴史的な経過の中で、現状のような形が妥当なところかなというようなことで、現在落ち着いてきているのかなと。そんなことを思います。

(中條委員長)

嫌みな質問をして恐縮ですが、ご覧になって、4校がそれぞれ魅力あるという理解でよろしいでしょうか。

(百瀬副委員長)

魅力といますか、特色といますかね、そういった教育活動をしていると私は感じております。

(中條委員長)

ほかの方、何かご意見ありますか。いかがでしょうか。

現状で十分じゃないかと。十分だと。

長谷川委員、さっきご紹介いただいた資料の中に、いわゆる市内4校のものもありますか。

(長谷川委員)

はい。

(中條委員)

はい、では数だけご紹介いただいてもよろしいでしょうか。

(長谷川委員)

県ヶ丘が、1番古いのは11年ですが、11年が18名、12年が46名、13年が44名、14年が30名、15年がピークで72名、16年が42名、17年が65名。

美須ヶ丘が平成11年39名、12年で86名、13年66、14年45、15年が130、16年が61、17年も61。

深志が11年45、12年39、13年43、14年44、15年58、16年24、17年18。

蟻ヶ崎高校が11年13、12年67、13年13、14年11、15年83、16年74、17年35です。

(中條委員長)

ありがとうございました。平成15年が極端に各校が多くなった理由があるのですか。生徒数が増えれば、学級数は当然調整されるわけですね。もしわかれば次回お願いしたいのですが。

(百瀬副委員長)

先ほどの発言に補足させていただきますが、4松本地区の場合はですね、私学の存在ですね。これがありますものですから、生徒の定員も含めて、そういう公私協調ということなことでやっているという。そのこともやはり念頭に入れておくということは非常に大事なことじゃないかと思います。

(長谷川委員)

15 年が非常に膨らんでいるのが、原因は松商学園が、具体的にいうと併願が可能になって、それで併願可能で合格をしておいて、公立を受けてもいいよというようになったわけです。ですので、思い切って自分の行きたいところに挑戦してみようみたいな気持ちの生徒が多かったというのがあります。

(中條委員長)

はい、という状況だそうです。これを踏まえて、今、長谷川委員からありましたが、不合格者数のみをもって議論はできませんし、かつ、これは併願との含めた、特に都市部の私立高校とのバランスも、ある程度考慮しながら考えていく必要があるというご意見でしたので、一応参考までに長谷川先生からのご意見です。

ほかにご意見がございましたらお願いします。

では、事務局お願いします。

(吉江高校教育課長)

先ほどの流入出の関係の 7 区との関係、若干述べさせていただきたいと思いますが、実は、平成 15 年度はですね、7 区から 11 区に流れた方が 67 人でございました。これが平成 16 年が 133、それでさらに 17 年が 134 ということで、大幅に動いているような状況。その理由は、私どもといたしましては、平成 15 年までは、昭和の 49 年から始まりました、旧 12 通学区制の中の、いわゆるパーセーターと言っておったのですが、パーセント条項によるものの、出入りが非常に限られておりましたので、なかなか行けなかったと。

さらにはその時代の初めのほうは、塩嶺トンネルが開いておりませんでしたので、JR が非常に遠回りであったのが、今、交通事情もよくなりまして、それで大通学区になりました 16 年からは大幅な動きになっているというようなことで理解しているということです。

(中條委員長)

11 からと。

(吉江高校教育課長)

16 からです。

(中條委員長)

ごめんなさい、11 区から 7 区、7 区から 11 区。

(吉江高校教育課長)

7 区から 11 区。

(中條委員長)

本当に。

(吉江高校教育課長)

失礼。11区から7区。失礼いたしました。そんなことでご理解いただきたいと思います。

(中條委員長)

松塩地区から諏訪・岡谷地区へのということですね。

わかりました。ほかに、ご意見はございますか。

(宮川委員)

いいですか。

今の数字はこちらから向こうへ行った数字ですか。確かですか。向こうから来た。

(中條委員長)

いや、こちらから出た数です。11区から7区ですから。

(吉江高校教育課長)

7区から11区へ流れたというのは、例えば16年ですと27名。それと17年ですと36名という数字になります。ですから大幅に流出していますね。

(宮川委員)

大変失礼なことを聞いていいですか。4つの学校だとほとんど同じクラス数で、来ているわけですよね。やはり、県内で見ればランクというのがあるんじゃないかと思うんです。それでやはり、自分の力を試そうとか、いろいろなそういう意味でその高校を受けたり。どうも危ないから、このくらいじゃないかとか、もっと危ないからこのくらいかなと、そういうことは、全然レベル的にはないんですかね。そういうものがあるからこの4つであるような気もするんですよ。

同じレベルであれば、それこそ豊科のほうに来たっていいわけで、大町に行ったっていいし、いろいろあるので。やはりここへきて、真ん中に4つのこの学校がやっていると、そういうランク付け、それがまた変な意味でひとつの魅力みたいなもの、競争させる魅力的なものになっているのではないかと、そういうことは考えられませんか。

(中條委員長)

たぶん誰に聞いても同じ答しか返ってこないと思いますので、申し上げますと、単純に世間一般の理解で申し上げれば、そういうことはあるのではないかと思います。ただ、それがじゃあ出るときも本当に順番の偏差値とか、高校入試の点数をつけたときにそうになっているかという、決してそうではなくて、鶏口牛後、またその逆竜頭蛇尾も当然ありますし、ただこういうかたちの帯が並んでいるのは間違いない。

(宮川委員)

そうするとここは学年で中学校からこの年数はここだけ特別多かった、翌年は少なかったとか、この数字につきましてもいろいろあるわけですよね。そうすると中学生が選択す

る中では、今の深志はどう、今の県ヶ丘はどうとか、今のあれはどうとか、そういう何かそこにあるんじゃないですかね。だからそこに魅力を感じるから、今度はそっちをたくさん受けてみよう、いや逆にこうだよという、そういうことは、長谷川先生考えられないですかね。塩尻、飛んでいるじゃないですか。いろいろ。

（中條委員長）

実際に進路指導をされている立場で。どうですかね。

（長谷川委員）

一番「ここにこだわる」というので見ると、一番、ひとつの可能性としては部活動ですね。今自分がやりたい、高校に行ってこういうスポーツをやりたい。あそこのチームはこういうふうにいらいしい、じゃあ意地でもそこに行きたいというのが、そういう生徒はやはりいます。

単に「進学」ということになってくると、深志高校、県ヶ丘高校あたりに行きたいなという気持ちの生徒は多いですし、例えば音楽関係いうと美須々に行きたいなとかいう子はやはり多いですが、そのキャラクターがそれぞれあります。

（中條委員長）

補足すると美須々ヶ丘は3年連続、吹奏楽全国大会に出ていますので、最近ではそういうこともありますし、松商には負けていますけど、放送部が全国大会に出場してますね。

（宮川委員）

それがきっと魅力の一つでしょうね。

（中條委員長）

そういう子もいる。

（宮川委員）

そちらの先生方がいうには。

（中條委員長）

そうですね。ただ我々のころは蟻ヶ崎はまだ共学ではありませんでしたから、女生徒で違う高校へ行けても、やっぱり私は蟻ヶ崎高校へ行きたいという、友だちが我々の年代ではいましたが、今は共学になりましたので、そういう意味では、百瀬先生がおっしゃった昔の一中、二中という言い方がいいかわかりませんが、それから、元の松本高等女専校と、松本市立中のような形ですかね。

進学だけで見ちゃえばさっき言ったような形に近いですか。

それプラスあるとなるとやっぱり魅力、学校そのものの魅力ということで、自分にとって「この部活がある」というところですね。

県陵の魅力はなんですか。サッカー、バスケ…。

(長谷川委員)

運動部はそれぞれ人が集まるので、面白い。

(中條委員長)

というような魅力ですか。

まだ時間がありますので、全体としてどうしても困るということはないようですので、全体として、もしくはそれ以降の、特に専門のご意見がありそれもいいですが、専門校の魅力付けの中で、再編案の、県教委の魅力付けの中でも専門高校については、拠点校化をできるだけ図りたいんだと。特に第3通学区については工業高校の転換等々の背景としての拠点校化というのが、反映されているというふうに伺っていますけれど、この第4通学区においては、特に専門高校の拠点校化いうところは特に案としては、今のところはたたき台に盛り込まれてはいないという理解でいいですか。

(柳澤教育主幹)

結果として見れば、商業、農業は通学区に1校ですので、そういうところで取り立てて記述しない。

(中條委員長)

工業高校も2校のまま。

(柳澤教育主幹)

はい、そうでございます。

(中條委員長)

というようなことも含めて、いかがですか。

(今井委員)

拠点校という考えは、非常にやはり、やっていかなければならない考え方だと思いますね。私はちょっと心配しているのは、この地域で工業高校が池工と松工とありますよね。

これって、本当に将来的にそれぞれを教える学校の先生って確保していけるんですかね。ちょっと前に、非常にいわゆる学校の先生の、工業高校のですよ、応募者がかなり減っているという話をちょっと聞いたことがあるんですよ。ちょっと本当に確かに今、工業系の学科を出ると、特に去年、今年ぐらいですとかなり売り手市場になっていますので、そういった面で本当にここの必要な資質を持った教員の確保というものが、将来的にどのように教員に対して見ていらっしゃるのかというのがちょっと関心があるのですが。

(中條委員長)

事務局お願いします。

(吉江高校教育課長)

すみません。確かに民間企業さんの場合にも、2007 年問題とかというようなお話しもありまして、大幅な退職という大変な時期を迎えると。そういうことの中から、今後の採用がどうなるかというようなご心配、また実のところはどの県におきまして、そろそろ教員の大きな退職の時期を迎える面は、正直なところございます。

こんなこともありまして、今後採用はどうかというようなお話しもありますが、私どもは基本的には現時点におきまして、採用において十分にご応募をいただいておりますので、ある程度以上の確保はしていけるかというような予測をしているところでございます。

(中條委員長)

大北地区の高校に、例えばということで池工のミニ総合学科、志学館に北、南からということも含めて、北のほうではという意見がこちらからご提案をさせていただいていると思いますが、実態としてみると建築科は池工にしかないのですが、松工へ、大北地区から来ている生徒数は平成 17 年度しかわかりませんでした、10 名だけです。

さっきの資料で、逆に南安曇大系沿線から池工への進学数は 44 名ということで、学科人数、進学希望調査からすると、このエリアは武蔵工大付属工業高校としてありますし、松工を合わせると人数はカバー、数はカバーできるんですが、今、人の流れで見ると実際は、大北地区から普通科に関してですが、遠いということもあるかもしれませんが、池工のほうがむしろ多くて、松工へは 10 名ということです。

そんな中で、池工を含めての、例えば拠点校化。池工をどうするかということを絡めての拠点校化というのが、実際に現実的にできるのかどうか、その辺を含めてご意見をお願いいたします。

どうでしょうか。これに限らず、これまでの議論を含めての、もしくは確認する必要があるればそれを加えて。

(鈴木委員)

県の再編候補案で、松本工業の定時制の統廃合というか、募集停止と、筑摩高校定時制の募集停止と、現在、昼定と夜間定時制があるもの定時制課程の多部制・単位制というのが出ているんですが、この議論はいつやるのでしょうか。

(中條委員長)

多部制・単位制をやるときに、松工定時制の 13 名が筑摩に移管されるということで議論をしましたが、従って今後どうなるのかでそれを議論するということを考えていませんので、今必要があればそれは出してください。

(鈴木委員)

先ほどの松本筑摩の多部制の規模のあたりでも触れたのですが、全国的に見て、今日は静岡も出ていますし、前回は資料としては富山県が出ていますが、多部制・単位制の持っていき方によっては、他県では、かなり高いレベルの進学校になっていたり、今日の静岡の資料を見てもわかるように、かなりの倍率で不合格者が出ているんですね。

ということは、どういうことかという、現在、お聞きすると松本筑摩の昼間の定時制のほうへは、およそ 8 割が中学校時代の不登校を経験した生徒、2 割が全日制の中途退学者ということらしいですが、そういう子が、多部制・単位制の運用のしかたや、あるいは中学へのアナウンスの仕方によっては、行けない学校になってしまう。今、昼間定時制にいている子が実は行きたくても行けなくなってしまう、そういうことになりかねないんですね。そういうところの議論も想定して、方向付けといいますかどんな定時制課程をここで作るとかっていうような議論もして、方向を示しておく必要があると思います。というのが、一点です。

もう一点ですが、そのことがカバーができないと、今、松工の夜間定時制に来ている生徒の行き場がなくなるという問題があるかと思います。その辺というのも議論するべきじゃないかと思います。

やはり先ほどのお話でいうと、現在の定時制の生徒も定時制課程のまま卒業するように、工夫していくというようなお話しでしたが、候補案では 3 部つくるというふうにいたしますけれども、やはり、午後部をつくったときに、それが本当に可能なのかという問題が、気になる。

県の最終報告は、実は平成 15 年に出された、「多部制・単位制検討委員会」の報告があって、従ってこういうことについては、高校改革プラン検討委員会ではそんなに議論はされていなくて、その報告書があるからということになっていたのですが、その報告書を見ると、状況によっては午前部、午後部でも、2 部でもいいととらえているんですね。松本筑摩では、昼間の定時制と夜間の定時制があるので、又、単位制というシステムも導入しているので、一定のノウハウは蓄積をしていると思いますが、ここでさらに午後部を入れる必要性については、いかがなものかと考えます。

少なくとも全日制の生徒がいる以上は、現状の昼間定時制という名前を「午前部」、夜間定時制という名前を「夜間部」というような、看板の掛け替えがあったにしても、午後部というのをつくるとするのは、他県のいろいろな報告からかなり難しい部分がある。これは、教員の側でも難しくなってくるし、生徒の活動の中でも非常に難しい部分があるという報告があったりしますので、その辺のところも検討する余地があるんじゃないかと、3 点の検討の必要があるというように思います。

多部制・単位制をどういう学校にしていこうかということの枠組みですね、運用の仕方。松工の定時制をどうするのか、それと、3 部というふうに書かれていますが、3 部でいいのでしょうか。

(中條委員長)

今の 3 点プラス、きめ細かな学習、少人数制の、むしろメリットといいましょうか、提案ですか、言葉的には居場所でしたか、そういう中身、不登校だ、中途退学という子どもたちが、逆に頑張って全日制よりもいいところへ、どんな道であれ、結果として行けたということになればそれはそれでいいと思うんです。

ただ、我々の中で、3 部制が望ましいか、2 部制が望ましいか、全日制との併設を物理的、技術的な可能性検討をするのは、私は本意ではないと思いますので、意見として、今日もありませんが、全日制の子どもたちがちゃんと学校を卒業できるようにするということと、

それから今の、逆に鈴木委員の発言でいえば、人気が出てきて 80 人じゃ足りなければ、それはもう 1 学級増やすこともあり得るでしょうし、そうした努力は今後の具体化の中でしていただけるんですよ。

そういう前提で、いったん意見をお聞きすることにとどめますが、よろしいですか。

(鈴木委員)

私は、議論を進めていただきたいと思います。

(中條委員長)

どういう意味のですか。

(鈴木委員)

県の示された候補案のとおりでは、やはりまずいかなと思っていただければ。

(中條委員長)

それは「3 部制」という意味ですか。

(鈴木委員)

3 部制でもすし、定時制の体質も含めてあるいは...

(中條委員長)

それは議論していいと思いますが。ただ、1 回松工の定時制 13 名を移していくということについては、第何回かはちょっと忘れましたが、いったん議論はしました。それは事実として確認しています。

「3 部制」か「2 部制」かは、我々が最終報告に盛り込むべきなんですか。必要があれば、ニーズがあれば「3 部制」で、ニーズと、それから確か前回鈴木委員からは午前、午後の先生方の問題でしたか。連続性の問題と、それから子どもたちが取れる時間数の問題等々で、むしろ、昼間、夜間のほうが、運用としてはやりやすいのではないかというご意見をいただいたと思いますが、その辺も含めて最終報告に盛り込む必要がありますか。

(吉江高校教育課長)

今、鈴木委員さんからお話ございましたように、平成 15 年に出しました、多部制・単位制の県教育委員会の報告書は、ベースは 3 部制が好ましいが、2 部制もありだろうというような内容になっているのは事実でございます。

私どものほうで、3 部制というのを前提におきましたのは、基本的に、以前も資料でお示しましたように、「3 修」いわゆる 3 年で、卒業できるような形で、いわゆる単位取りをしていただくためには、例えばの話しが、午前部の人は午後部を、言ってしまうと弾力性のある選択で選ぶことができる。あるいは、夜間の方は午後部を同じように弾力性のある取り方ということ。というようなことをやることによりまして、4 年で卒業をするのが、3 年で卒業できるというようなことを考えた場合に、より好ましい形態ではないかと考え

ております。

ただ、今、委員長さんからお話しいただきましたように、私どもは基本的に、例えば、今いただきましたようなご意見があるとすれば、そういうようなご意見を、例えばこちらのほうの委員会の報告の中に付記事項的に入れていただいています、それが何につけても、今いる生徒さんが、より満足いただく形で卒業いただいて、さらには受け入れるということ、いろいろ支障がないような形で学校運営をしていくことが大前提でございますので、そんなことで、問題提起というような位置付けをお願いするということで、いかがかと考えている次第でございます。

（中條委員長）

これまでの議論の中で木工については 13 名の定時制の生徒がいて、必ずしも工業科の希望ということではなくて、中野実業の普通科への転換だとか、池工はそのまま存続ですが、定時制をそのまま存続させる、池工とそれから木曽はそのまま定時制を存続させるんですが、池工は旧校名は忘れましたが、設立当時、定時制設置当時から普通科で、という説明が確かあったと記憶しています。従って 13 名については、工業系の学科が必要であれば、それを当然引き続き全体で考えられると思いますので、いったん筑摩高校への受け入れという前提の議論がされています。

もし、今日だけではありませんので、今後の議論の中で、必要があれば実際課題等々があれば、それをぜひ出していただいて、ただ我々が、技術論まで含めてこの中でできると思いませんので、課題提起の件を補足ではなくて、ちゃんとメインストーリーに書く必要があれば、それを書きにしますので、よろしくお願いいたします。

もう少しで時間になってしまいますが、今日、特にご発言されたい件があれば、お聞きますが、何かございますか。

（百瀬副委員長）

今の筑摩高校を多部制・単位制に、専門独立校にしていくと、こういう中ですね、一応、1 学級の定数は 40 名ということで、募集していると思いますが、実際問題としては、筑摩高校の昼定の学校要覧を見ますと、3 つ、あるいは 4 つくらいに分けて、学級編成をしているわけですね。それだけやはり、生徒の指導、学習あるいは生活、両方を含めましてですね、少人数での指導、こういう必要があると。こういうことで、そういう対応をしてきたと思うんですね。

ぜひその辺はやはり、全日制のいわゆる 1 学級 40 名ということにとらわれなくて、定時制の枠として、やはり 20 人くらいから 30 人以内のもので、40 人以下の、そういう学級定数というか、そういうような形での募集というようなことが、私は必要ではないか、こんなふうに思っているわけですが、その辺も議論をしていただければありがたいと思います。

(中條委員長)

それは先ほど、鈴木先生から紹介があった、八割のお子さんだとか二割のお子さんということを踏まえて、やはり必要であるというご意見でよろしいですかね。

それに反対される方はどなたも。いらっしゃれば。

いらっしゃらないと思いますので、それでは、我々の意見として、考慮をしていただくようお願いしたいと思います。

あと、工業系の学科、それはこれからだと思いますが、新しい多部制・単位制としての筑摩の中に、そういった専門科目も、松工分の定時制のカウントを持って、引き継がれるという理解でいいですか。松工の定時制の子どもたちは、工業科ですね。

(吉江高校教育課長)

先ほども、委員長さんからお話しもございましたように、実は基本的に私ども長野県の、一つの方針というか、動きといたしましては、中野実業高校を普通科の定時制に転換いたしましたように、必ずしも定時制の生徒さんが、いわゆる専門科目を望まれているというような認識をしておりませんので…。

(中條委員長)

それは理解しておりますけれど、実態は…。

(吉江高校教育課長)

実態としますと、今後多部制・単位制に、単独校としまして松本筑摩高校がなった場合には、ベースは普通科ということで考えている次第でございます。

ただ単位制でございますので、なんらかの要素としましてそのようなものを組み入れるというのは、今後のご議論の中で可能だと思っております。ベースは普通科のベースで考えております。

(中條委員長)

では次回で結構ですが、松工の定時制の科目というんですかね、普通科分は結構ですので、工業系科目として、どんな科目を4年間ですか、履修していくのか。例えば、機械科があれば機械加工が何時限、そういうのがあれば。それがもし、「ほとんどありません、ほとんどは普通科目です」ということであれば、それはそれで構いませんし、実際の製造系の会社に勤めていても、むしろ基礎を勉強したいということで、普通科のニーズが高いということなのか、一応確認だけをお願いします。

それではすみません、そろそろ時間になりますので、ほかにご意見ございますか。

(長谷川委員)

以前話しの中で、名前の挙がっている高校については必要に応じて、と言いますか、ヒヤリングする可能性が、ヒヤリングしたほうがいいのではないかとということもあったと思うんですが、今の11区の中の話しでも、13名についてもそうですし、これは全く何のこともなく、とにかく案としてまとめちゃえ、移動しちゃえというのは、乱暴だと思います

し、やはり筑摩高校が実際に今どのような校地で、本当に3部制を入れて、その上で全日制、定時制を併設させることが可能かどうか、カリキュラムはつくれるかどうかということについては、やはり当事者に聞いてみないとわからないところがそう意味であって、なかなか意見だけでやってというのは、ちょっと苦しいところがあるのかなというふうに思うんです。

それで、今後ヒヤリングしながら、これで一回りしたわけですので、12、10、11、の各区ですか。それでもう一回やっていくとなるのですが、このまま続きの議論になっていくのかもしれないんですが、やはりどういう考え方でいるのかということ、ある程度聞きながらというか、情報もほしいところもやはりありますし、そういうのを例えば、今の筑摩の定時制で一番意見として上がっているのが、きめ細かな対応、現状でやっていた対応ができなくなることに對して、すごく保護者の皆さんは不安に感じているところもあったりとか、あるいは例えば大町のほうでも、木曽のほうでもやはり同じようなことが起こっていると思いますが、そういう意見を吸い上げることをいっぱいやったほうがいいんじゃないかと思いますが。

（中條委員長）

今のご意見に対して、ご意見がある方。

ヒヤリングそのものは設定しませんが、いったん期限が区切られている中で、我々の責任として、第9回、10回、11回、12回、13回、14回...という位置付けの中でそれをやることは、時間的に難しいので、もしやるとすれば、これとは別に、推進委員会とは別にそういう機会を設定して、我々が出掛けていって、そういったものを確認するかだと思います。

確かそういうご意見が前にあったときに、生の声が必ずしも、全体を反映しているのかというご意見、それから伺っても、要はただ反対、反対という声を伺っても本当にいいのかというようなご意見もあったように記憶していますので、その辺も踏まえて、じゃあどうするのか。推進委員会としてきちんと位置付け、かつ聞くべきだということであれば、月3回等の推進委員会を設定していかなければいけないので、それをご意見として位置付けできます。

有志で例えば非公式的に県の教育委員会のホームページに今月の授業参観公開校、藤本委員の学校のようにいつ来てもらっても構いませんという学校もありますので、そういったところに行くということは当然可能ですから、個人として行くことも可能ですし、時間を決めて推進委員として行ける方については集まるということもあると思います。やり方は幾つかあるんですね。ただやったことの位置付けをどうするのか。にもよってやり方が変わってくると思います。

（鈴木委員）

その議論のときに私が発言した記憶がありますが、北と南、北には4校連絡協議会、南には3校連絡協議会というのがあって、それは、同窓会だとか、PTAだとか、自治体の皆さん、あと出ているものなんですけれども。その人たちに5分でも、10分でも時間を制限してもいいだろうと思いますが、今の意見を聞くというようなことは、それほど無理な

くできるのかなと思いますが、いかがでしょう。

（中條委員長）

そういった位置付けがあるだろうということを前提に、今までそれを２回実施しました。木曽についてはきちんとした連絡協議会があったので、いただいておりますが、宮川委員さんから状況等、それからそこで配られています資料を配付いただきました。

それから大北地区については残念ながら、そういう形の連絡協議会はないと私は理解していますが、ただ大北地区の動きについてということで、先回下川委員からご紹介いただきましたので、それでもまだ不足だということであれば、もしくは違う見方のほうが、全体を該当する意見を言っていたかやすいということであれば、それは委員会のほうで我々が、大北と、木曽に限らずどこであれ、あると思いますが。

（鈴木委員）

部会との関係ですが、部会は今後開かないということなんですね。

（中條委員長）

開かないというか、我々の責任として、いったん、期間を限られた中で、今の月２回ペースのそれに、それを当てはめるということは、物理的に不可能であるし、それから、確かにはっきり覚えているわけではございませんが、あらためてこの委員会とは、別の部会として集めるということの難しさというのがあって、その結果として第４全体で議論することになって、今日はみんなで、北の意見、南意見、みんなで木曽を議論しよう、それから大北を議論しようということやってきたつもりでいます。

（鈴木委員）

ですから、地域の声をここで聞くということはないのですか。

（中條委員長）

さっき鈴木委員がおっしゃったような意味でのことは、当然この委員会の中で、例えば、５分や１０分や３０分やる必要があると皆さんが認めていただければ、それはそれで構わないと思います。

（鈴木委員）

私は、一推進委員であって、木曽を代表して来ているわけではないので…。

（中條委員長）

いや、そういうつもり言っているわけではなくて、一委員としての意見について、そういう形でどうでしょうかということを投げかけさせていただいているだけです。

(宮川委員)

時間経過していて申し訳ないのですが、私は今の住民の皆さんとか、私の意見を聞くということじゃなくて、長谷川先生の言われたのは、そういうものを言ったときに可能か、我々は、夢ばかり今言っていますが、それがベストだと思いますが、本当にそれが現実的に可能かと、それが現実的に可能なものを調査したりいろいろしないと、我々が結果でつくった素晴らしい方針が、やってみたらできなかったとなっては困るので、その関係をどうでしょうかというようなことを私は聞いたんですよ。

そういうことじゃないですか。

(中條委員長)

それは否定しません。ただ我々が考えていることが専門家として、無謀であるとか、できっこないじゃないかということであれば、事務局責任として、ちゃんと回答するべきだと。この場で言うていただかないと、我々の議論の時間も限られていますので。それを踏まえて、やはり我々が実際現実を見ようということであれば、それはやはりやらなければいけないと思います。

ただ申し訳ないですが、次回みんなで筑摩へ行きましょうとか、松工の定時制を見に行きましょうという、1回議論が飛んでしまうので、回数を増やすか、委員会とは別にやはり実施させていただきたいなと思います。

もし、そういうかたちでよければ、10月下旬、私は別に掛川に行く必要はないと思うんですが、みんなで筑摩高校へ行けばいいと思うんですよ。

それは否定しません。それはあくまでも個人的意見なので。

10月下旬から、11月上旬にかけて、他県の多部制・単位制高校の視察というのがありますから、同じように我々として、そういうことを、これは別に委員会の中とは別の日を設定するかですね。各4つの推進委員会とは別にということですが。そういうったことはあると思います。

ということで、それについてもし意見があればぜひ、少し伸びちゃって恐縮ですが。よろしいですか。

冒頭に言いませんでしたが、今日いただいた、県議会の定例会の中で、ある通学区は部会設置を委員長が拒否をしているという委員さんの発言に対して、事務局からは県教委としては部会設置を否定はしていませんというご発言があって、それだと委員長だけが悪いみたいに私は読めちゃうんですけども、そうじゃなくて、その通学区の、私がお場に行っているわけではないので、やはり新聞報道等、それも2つくらいの新聞を見ると、やはり時間的な制約の中で、そこは2つにわかれていたので、余計に難しいということもあると思うのですが、そういう時間的な制約の中で難しいんだということをおっしゃっているというように記憶していますので、はしごを外されちゃったような発言をいただくと、私も、つらいなという気がいたしました。

そういう意味で時間が限られているのは事実です。ただ、全体として4つの推進委員会が同じ結論をして延ばすんだということになれば、そういう可能性を否定されているわけではないと理解をしています。いったんは我々がスタート時に示され中でできるだけやっていきたいというのが、委員会として考えなければいけない話だと思います。

従って、月2回のペースもかなり皆さんに無理をしていただいて、今日は特に平日ですから、それぞれ皆さん、本務があるのに来ていただいているのも重々承知していますので、それをさらに数を増やすことがちょっと心苦しいものですから、非公式的というものも。

それから残念ながら土日を使って学校へ行くというのは、ちょっと不可能ですし、我々が行くから生徒を集めてくれというのもあるものですから、やっぱり平日しかないんですよね。もし希望があればぜひ寄せていただいて、県教委のほうで調整しますので、よろしくお願いいたします。

それではすみません、時間が延びて申し訳ありませんでした。

そうということで、いったん議論を前提に次回の推進委員会ですが、10、12、11、区ときましたので、次回10区、木曽地域について2回目の議論をしたいと思います。それに際しての、こちらがお願いした資料等はありませんでしょうか。県立林業大学と、木曽山林、林業系高校の連携の具体化について、先ほどの夢物語ではなくて、今の学校のことを、公立をベースに「こういう形で」というものがあれば、それがもしかしたら学校を超える部分があれば、例えば私、県として委託ということも、法人を利用するかどうかは別にして、公設民営ということはぜひ踏み込んで変えていければと思います。それを踏まえて、じゃあ、我々としても幾つかの方策というのを、できれば次回議論させていただきたいと思います。

それから今日、数字等で、少し不整合というか、違った部分がありましたので、できれば次回までに、数字の検討をお願いします。

ほかに何か、次回のことでありますか。先ほどの長谷川委員のご意見を踏まえて、次回は木曽で集約、という前提ですけれども我々が確認していきたい等何かございますか。よろしいでしょうか。もしあれば、資料等でしたらすぐにでもいただけるとと思いますので、事務局のほうにお願いをしたいと思います。

（西牧主任教育支援主事）

よろしくお願いいたします。

次回の推進委員会の予定ですが、10月30日の日曜日、午前9時から12時ということで予定をしております。よろしくお願いいたします。場所については未定です。合わせてお願いいたしますが、11月から12月までの日程確認表を20日くらいまでに送っていただければと存じます。以上です。

（中條委員長）

候補案が二つあって、23日の午後でしたかね。予備を30日の午前中のほうが、委員さんの出席数が多いということで、日曜日の午前ということで恐縮ですけれども、今のところは23日を前提に考えています。ここも、合庁も予約が入っているそうで、今、事務局のほうで会場については話はできないということです。

よろしいでしょうか。30日、日曜日の9時から12時。場所は松本市内のということで、以上で第9回の推進委員会を終了させていただきます。